

ALIVE

「Pieces of Heaven」未来編

蒼月

はじめに

この話は「Pieces of Heaven」の続編にあたります。

本編の「Pieces of Heaven」、過去編の「PAST」、その未来編がこの「ALIVE」になります。
この話を先に読むよりは、時系列順に「PAST」から読むか、執筆順の「Pieces of Heaven」「PAST」「ALIVE」と言うように読むことをお勧めします。

この話は過去の二編を読んだことが前提で書かれています。

現在、連載中です。

加筆修正をしながら不定期で更新中。

全10～15話程度の話になる予定（まだ未定です）

プロローグ

そのとき扉をくぐって現れた人影に釘付けになった。

見慣れているはずのその姿は、なぜか見知らぬ人のようだった。小柄な身体をパンツスーツで包んだ彼女の連れは、こちらも見慣れているミュージシャン。

高柳瑛（たかやなぎあきら）というロック歌手。ハードな曲も、メロウな曲もその歌唱力でこなす一流ミュージシャンだった。スレンダーだが、背の高い彼の陰に彼女は隠れてしまう。

静かで上品な店内。限られた人間が酒を飲み、語らうこの場所を教えてくれたのは彼女だった。だから彼女がここへ来ても何ら不思議はない。

俺の視線に気付いたのか、カウンターに座る瞬間に彼女がこちらを見た。だが風景を見るのと同じように彼女の視線は滑り、そのまま隣に座る男に向かって微笑んだ。

俺の中で何かが熱くなった。自分がどこにいるのかも、自分が一緒にいる相手が誰なのかも考えられないほどに頭に血が上った。俺は自分の相手も放りだし、彼女に近づくとその腕を取った。微かに眉をひそめて何か言いたげな彼女を引きずるように俺はその店を出た。

いつもと変わらない朝を葉月玲（はづきれい）は迎えた。

常宿にしているホテルのひとつ。そのジュニアスイートの眺めは悪くなかった。ここ一年くらい、玲は都心のホテルの幾つかを常宿にして泊まり歩くことも多かった。

大きな理由のひとつは仕事が格段に増えたこと。殆ど寝るために帰ることも多くなって、家に帰るのが面倒なのである。一人暮らしでも家事はしなくてはならない。ホテルに泊まれば、部屋は汚れないし、食事の心配もいらない。もっとも、ホテルで食事をすることも殆どないのだが。

マンションに帰るのは週の半分くらい。あのマンションは今でもvisionの三人が自由に出入りしている。けれどこちらも事情がずいぶん変わってきて、同じく忙しさを増した彼らは以前ほどあのマンションに来る時間はない。けれど来ないわけでもない。その辺の微妙な関係が事情の二つ目。

そしてもうひとつの理由は.....

起きがった玲は時間を確認するとバスルームでシャワーを浴び、簡単なメイクをした。せいぜい玲の普段のメイクは十分程度。若い頃から仕事以外で丁寧なメイクをしたことがない。早い身支度は、それでも極端な低血圧の玲には酷く大変な作業なのだ。

部屋にセットしたコーヒーマーカーから入れておいたコーヒをブラックのまま飲み、出かける前に寝室を覗くとまだ眠っている男に声をかけた。

「私、出かけるわよ。先に行くから遅刻しないでよ」

ん？ともあとも聞こえた寝ぼけ声をそのままに出かけることにした。いま撮影中のドラマと一緒に競演している男だった。玲は基本的にそれほど親切な人間ではない。昨夜一緒に過ごしたとはいえ、今朝も一緒になってロケに行く気はないし、親切に目覚めるまで起こす気もない。いちおう声はかけてやったのだから、あとは起きようと遅刻しようと男の勝手だと思っている。

端正な顔も、眠っている顔はまだ幼くも感じた。自分よりもいくつ年下だったか.....そんなことを思いながら玲は部屋をあとにした。

現場には自分で車を呼んで出かけた。運転が好きなので自分でしてもいいのだが、帰りに酒を飲むことも多く、車はない方が無難だった。どうせ現場に行けば、冴子や川崎が車で来ている。そうかといって、男と過ごした朝にいちいちマネージャー達に迎えに来て貰うつもりもない。彼らはどうせ玲にはなにも言わない。また言われるほど子供でもなかった。

ホテルを転々としているのは、マスコミが煩いからだ。昔と違い、どこに写真誌のカメラマンが居るかわからない時代。なにを書かれようといまさら気にしていない玲だが、相手や現場に迷惑がかかるのも考え物だったから一応の対策だった。

現場に着くとさっそく冴子にヘアとメイクをして貰い準備をする。近場の街中のロケだったが、案の定男は遅れてきた。それでも撮影時間開始には、ぎりぎり間に合った。

「なんで起こしてくれないんだよ」

照明スタッフが準備する中、男の少し責める口調に玲が答える。

「起こしたわよ、ちゃんと先に行くって声かけたでしょ」

「知らねえよ。同じ現場来るのになんで置いてかれるかなあ」

ブツブツと独り言を言う顔は不愉快なのではなく、不可思議だという表情である。

「湊（みなと）くん、準備いいかい」

監督に呼ばれて、ハイと素直に歩き出す背中では長身だった。

一ノ瀬湊（いちのせみなと）。二十九歳だったと思う。

現在俳優をメインにやっている人気者の彼は、デビューは歌手だった。今では俳優業の傍らに歌っているという、位置が逆転したような彼だが、あまりに端正な顔は歌手よりも俳優に向いていたらしい。若い女性にはダントツの人気がある。黙ってスチールに写っていれば、言うこと無しの二枚目。

けれど中身はそこそこ砕けていて、お調子者の感じすらある。誠実ではあるが、けして堅くない。そんなところが彼を気に入っている理由だった。少し、元夫の若い頃に似ているかも知れない。

『恋人』というわけではない。食事をしたり寝たりする相手がイコール恋人なのだと言われてしまえば、そうなのかも知れないが、少なくとも玲にとっては違った。なぜならそこには『情』はあっても、『愛』はないからだ。

楽しいと思う。優しくもするし、されもする。けれど湊でなければならぬ理由はない。それは玲の付き合う人間が湊ひとりではないことでも証明される。そして湊と案外つかず離れず続いている理由は、湊がそのところを勘違いしていないせいだった。

たぶん湊にも他に女が居るだろう。玲を手に入れようなどと、勘違いを起こさない男である。だから玲は湊が好きだ。頭が良く、時勢が飲み込める男が好きなのだ。

『遊び』などと悟っているわけでもない。楽しいから一緒にいる。ただそれだけで、しいて言えば玲にとっては友人にSEXが付いてきただけの関係である。だがそれを万人に理解して貰おうとも思っていない。自分は自分。相変わらず自己完結している玲だった。

三日ぶりにマンションへ帰ると瑞紀（みずき）が来ていた。

「おかえり」

先に仕事を終えていた瑞紀が玲を迎える。

テーブルに散らばった楽譜、アップライトのピアノの蓋が開いている。このピアノはニューヨークへ行った徹(とおる)の預かりものだった。

「レッスン中？」

玲はコートを脱ぎながら訊ねた。

瑞紀は今度、映画の仕事でピアニストの役をやるらしい。最近頻繁にここへ出入りするの、ここにピアノがあるからだ。

「ごめん、もう三日くらいここに居るんだ」

「別に構わないわよ。ピアノも見てあげられればいいんだけど、私のは我流だから。

徹がいればよかったわね」

「大丈夫。大崎さんにも教わってるから」

「撮影は順調？」

「まあね。そっちは？」

「なんとかね」

「聞いているよ」

「なにが？」

「また、新しい男に手え出しただろ」

上目遣いの瑞紀に

「新しい？湊のこと？」

「違う、そっちじゃない」

譜面を片づけながら問いかける瑞紀に

「どっちだろ？」

惚けながら、キッチンに向かう。

「コーヒー？俺容れるよ」

瑞紀はあまり家事が得意ではない。

几帳面なのだが、料理とかをマメにする方ではなかった。その点は残りの二人がマメなので問題ないのかも知れないが。

瑞紀は玲と似ているのかも知れない。仕事をし出すと食事などどうでも良くなるタイプである。

「それともお酒にする？」

玲が訊ねると、

「明日も撮影あるから止めておく」

真面目な瑞紀は答える。

「食事はちゃんとしたの？」

「食べたよ。そっちは？」

「済んだ」

相変わらず瑞紀との会話は簡潔で素っ気ない。いつもこんな感じで事務連絡のようだと玲は思う。けれどそれが不快でないのだ。むしろ疲れなくていい。

玲は瑞紀との時間が嫌ではなかった。瑞紀との会話はどちらかということ、仕事仲間か姉弟の会話に似ている。玲にとっては負担のかからない相手である。似たもの同士は時に鼻につくこともあるが、互いを理解するには一番の相手である。

「俺、泊まってもいいかな」

「泊まってたんでしょ」

「違うよ、あっちで」

瑞紀が指を差したのは自分の部屋ではなく、玲のベッドのある部屋だった。玲がわざと首を傾げて、ひと呼吸置くと、

「明日、撮影なんだけど」

さっきの瑞紀と同じ言葉で返したが、結局はそれも承知の瑞紀に答えた。

「好きにしたら」

瑞紀は二十五歳になった。

出会って五年の月日は、元々大人びていたこの青年をもっと大人にした。最近の瑞紀はすっかり俳優である。玲とずっと共演しているトーク番組は今も続いている、半月に一度は一緒に仕事をしている。

「瑞紀、彼女居ないの」

「面倒くさい」

昨日とは違う男が居るベッドの中だが、どういうわけか瑞紀は他の男とは違うと思う。なぜか男と女の匂いがしない。実際、昔からそうだが身体を繋ぐことは少なかった。徹との関係に似ているかも知れない。体より心が求めている感じなのだ。単純に、近い場所にいたくて一緒に眠る感じだった。

だからいつまでも姉弟のように感じるのか。たぶん今日も瑞紀とは何事もなく眠る気がする。女を作ることが面倒だという瑞紀は、だからといってまったく女の気配がないわけではなかった。どうやって付き合うのか、恋人にするわけでもないのに問題も起こさない。片割れとはえらい違いだと玲は思う。

「あっちには、もう少しおとなしくするように言っておきなさい」

「自分で言いなよ。あいつに俺が言うわけにいかない」

「なんで」

「つかかって来るから喧嘩になるんだよ。めんどくさい」

「まだあんたたち喧嘩なんかするの」

「しないよ。俺が相手にしないから」

しばらくの沈黙のあと瑞紀が言った。

「機嫌悪いんだけど」

誰が……とは聞かなかった。

「見られたのよね」

「もう少し上手く扱ってよね。俺達が八つ当たりされるんですけど」

「面倒だから」

瑞紀の口調を玲が真似すると、

「まったく……」

そう言って瑞紀は溜息をついた。

「派手な噂になってるわよ」

「今度の女だろ？社長にも言われてるらしい。なにしろ相手が今売り出し中のアイドルだからさあ」

「この間も一緒だった」

「なのに、あいつ玲に文句言ったの？」

「お子さまねえ、相変わらず……」

「わかってるなら、もうちょっと上手く扱ってよ」

瑞紀の言葉に、玲は上半身を起こした。

「ちょっとあんた、もしかしてそのこと言いに来たわけ？」

「ばれた？」

瑞紀が舌を出す。

「まったく……」

この話を持ち出すために瑞紀は三日もここへ通い詰めて玲を待っていたと言うことらしい。

「いい加減、あの男を甘やかすのやめなさい」

「甘やかしてない。迷惑なんだよこっちも」

「どうだか」

「玲……最近、あいつに冷たいよね」

「そう……かな」

瑞紀と同じ二十五歳になったはずの男はいつまでも子供っぽかった。

—数日前—

玲は遊び仲間のひとりである、高柳瑛（たかやなぎあきら）と飲みに出かけた。

瑛は二十七歳のボーカリスト。巷では「カリスマボーカリスト」などと呼ばれて、ここ数年、圧倒的なセールスを誇る歌手だった。

瑛を見つけたのは桜井である。もともと桜井の事務所にスカウトされ、モデルや俳優をしていた瑛に歌の才能を見つけたのは偶然ではないかも知れない。纏ったオーラもただ者ではなかったが、桜井だけでなく、大崎も玲も彼の才能は感じていた。

桜井の指令の元、彼専属のスタッフが組まれ売り出すとたちまちのうちにトップに躍り出た。それから数年。彼はずっとトップミュージシャンだった。

低くスローなジャズが流れる店内。ドアを開けて慣れた店の中へ入る。そっと手慣れたエスコートをしてくれるのは、年下の男。昔の玲なら年下の男を伴ってこういう店に来るなどあり得ないことだった。

家庭の中に複雑な空気があった玲は、やはりどこかファザコン気味で、年上の男ならどんなに年齢差があろうと気にしなかったが、年下と聞いただけで拒絶反応があった。それがやはりvisionのメンバーと付き合いようになってからか、年令には一切抵抗がなくなった。

高柳瑛は事務所の後輩と言う立場にあたる。事務所の間人だからと言って皆面識があるわけではないのだが、瑛とは彼のデビューに関して桜井に相談されていた時期があったり、その後たまたま彼の私生活まで知る羽目になり親しくなった。

世間で『カリスマ』と呼ばれるだけあって、独特の雰囲気を持っている。簡単に言えば『オレ様』なオーラが半端なく漂っているわけだ。こういう人間を玲は何人か知っている。共通するのは唯我独尊。そして彼らは共通に少年らしさを失わないのだった。

瑛は体格もモデルをしていただけあって百八十を大幅に超える長身、しかも筋肉質の身体で、脱げば凄いと言うやつだった。短めの髪を金茶に染めて立たせ気味にしている姿は、昔はさぞややんちゃだったんでしょねと言わんばかりだ。これでも最近はおとなしくなった方なのだった。

このバーは会員制のために誰でも来れるわけではない。誰かの紹介や身元の確認があるので、業界の人間も多かった。店でのことがけして外に漏れる事がないからである。ここに来ると玲はカウンターに座ることが多い。この場所は純粋に酒を飲むために来ることが多く、馴染みのバーテンにカクテルを作ってもらうのが楽しみなのだ。

瑛と共に定位置に着こうとして、自分を見つめる視線に気付いた。こんな風に刺すような視線で見られることにも、もう慣れている。どうしてこんなに子供のように無防備で居られるのか、いまだに玲にはわからない。

それが鬱陶しくもあり、また愛おしくもある。正直自分でもこの感情は持て余していた。自分は彼をどうしたいのか、どうするつもりなのか全然わからなかった。

しかも相手は玲が戸惑っていても、それを気遣うような余裕は見せない。瑞紀のように一定の距離を測って、土足で踏み込むような真似は絶対にしない接し方ではなく、いつでも自分の感情を露わにする。だからむしろ、もう短いとは言えないつきあいを続けている自分を誉めたいくらいだと玲は思っていた。けっきょく、こちら『情』にほだされているのかも知れない。

だがそれを敏感に察知する相手ではなかった。ある意味では、向こうは自分のために世界が回っているように感じる事が出来る人間だからだ。そして主人に向かって走る犬のように、ぶつかってくるまで止まらないのだから始末が悪い。こちらが転ぼうとお構いなしなのだ。

玲の視線を瑛が辿ろうとしたので、彼女は視線を戻して瑛に微笑んだ。嫌な予感が掠めたが、案の定こちらに向かってくる影を感じて身構える。

「今日は予定があるんじゃないかなかったっけ？」

「そうよ」

「これが？」

「先に約束してたの」

玲が答え切らないうちにいきなり腕を捕まれて店の外へ連れ出された。

「甲斐っ、離しなさい」

店の外へ出れば、どんな視線があるかわからない。つまらない諍いを世間に晒す気はなかった。背の高い甲斐は、出会った当時はただ痩せていただけの少年だったが、大人になるにつれ綺麗に筋肉が付き、今ではどう見ても立派な大人の男だった。そう、見かけだけは。

「俺とはぜんぜん会ってくれないのに……」

腕を捕まれたままの玲は、甲斐の腕を払い落とすと溜息をついた。まるで、『遊んでくれない』と駄々をこねる子供と一緒にだった。

「あのね、私も忙しいのよ」

「嘘付いたな」

「嘘じゃないでしょ」

数時間前に仕事場に連絡があって、今から会いたいと言うから『まだ予定が終わらない』と答えた。どうやらそれを『仕事が残っている』と勘違いしたようであっさり諦めてくれたので、そのまま電話を切った。瑛と約束していたのはほんとで、だからまだ一日の予定が終わっていないのもほんとだったからだ。これをストレートに、誰かと会うなどと言えばごねられるのがわかっていたから、と言う理由も確かに存在するのだが。

最近、玲が甲斐を避けているのは否めない。色々考えるところもあったし、なにより直情型の甲斐はのめり込むと怖い。甲斐が距離を保てない以上、玲の方がそれを保とうとするのは必須で、それを『逃げている』と問われればそうかも知れなかった。

「自分の相手を放りっぱなしよ」

玲は先ほど甲斐と居た、見たことがある少女を思い出す。最近その存在が目立ってきたアイドルである。まだ大人になりきれない少女と大人の間のような感じで、若い男達に圧倒的な人気があるらしい。

今回甲斐が主役を務めるドラマの相手役で、すでに二人の噂は玲も聞いていた。まだ初対面の顔合わせから二ヶ月も経っていないだろうに。その噂は派手だった。

「店に戻りなさい」

こんな深夜とはいえ、店の前で争いたくはない。さすがに玲は周りを気にした。マスコミにでも気付かれたら叶わない。まるで痴話喧嘩ではないか。

「玲、どっか行こう」

「馬鹿言わないでくれる」

互いの相手をどうするつもりなのか。今の甲斐には玲しか見えていない。仕方なく甲斐を放って店に戻ろうとした玲の腕を再び甲斐が掴んだ。

「離して」

振り払おうとした時、

「れい……」

呼びかけられて店の入り口を振り返ると、瑛が壁にもたれて腕を組んだままこちらを見ていた。さすがにそうやって立っているだけで圧倒的な存在感だった

「あきら……」

呟く玲に瑛は近づき、甲斐に向かって言った。

「悪いけど、今日は俺が先約だったんだ。まだ話し終わってないし、今度にしてくれないかな。だいいち、こんなところでお互い見つかったら困るじゃないか」

大人な瑛の言い分に、甲斐が彼を睨む。まずいな、と玲は思った。甲斐の性格からして喧嘩になりかねない。だが玲が取り繕うとする前に瑛はさっさと自分の車に玲を乗せた。運転席にいるのは瑛のマネージャーの梶（かじ）である。あまりに早く戻ってきたので驚く梶に

「早く出せ」

瑛はそう言って車を出させた。呆気にとられた甲斐はその場に取り残されたまま。あとの処理に頭が痛い玲は思う。そんな玲に瑛はしばらくなにも言わなかった。

「それでどちらに向かいます？」

黙ったままの玲と瑛に困り果て梶が聞いた。

「あ、ごめんなさい」

我に返って玲が答えると、

「自宅じゃない方がいいか……いつものホテルにするか？」

瑛が聞いた。

「そうね……」

玲が考え込む。このままマンションに帰ったら甲斐が来るかも知れない。今日はもう会いたくない気分だった。

「なんだったらうちへくるか？」

「まさか……」

「別に構わないけど」

「あなたは構わなくても……」

玲は瑛の家で待っているだろう人間を知っている。

「あいつも歓迎すると思うけど？」

「それにしたって、何うには時間が遅すぎるでしょ。行くならもっと早い時間の時にするわ」

いくらなんでも気が引けた。玲が瑛と気兼ねなく会うのは、あくまで男女の仲ではないからだ。

瑛には大事な人間が居る。思い続けてやっと手に入れられた想い人なのだ。瑛がその人を裏切ることは絶対にない。

梶は瑛に言われて玲をホテルに送った。玲は社長職を退いて会長になった桜井が、ずっと大事にしてきた歌手だ。今はアメリカにいる神崎徹（かんざきとおる）と共にアカデミック・エンターテイメント、通称A・Eの所属タレントだった。

瑛も同じくその所属タレントで、梶は瑛のマネージャーだった。

瑛は今でこそ落ちついたが、ずっと問題児でマネージャーが居着かずに次々と変わるタレントだった。年上の落ちついて冷静な梶が担当になってから瑛も落ちついた。

いまでもある意味瑛は問題児だが、昔に比べればずっとマシだろう。梶も高望みはしていない。諦めの境地なのだ。とりあえず瑛はそれらの問題を抱えていたとしても有り余る才能を持っている。あとは梶が我慢すれば良いだけなのだ、梶はマネージャーの本分として諦めていた。

梶は玲のマネージャーではないが、事務所では玲と徹は別格扱いで、社長だった桜井が直々にマネジメントしていただくくらいである。当然梶にとっても大事な人間で、一緒にいる以上、梶にも責任がある。A・Eにとっては一番大事な人間と言っても過言ではなかった。

「こちらでよろしかったですか」

玲の常宿する幾つかのホテルは梶も知っている。そのひとつに送り届けて確認した。いつでも部屋は押さえてあるが、先ほど来る途中で連絡を入れて確認もした。

「ありがとう、ごめんなさいね。こんな遅くまであなたまで振り回して」

玲は十四歳の時からこの世界にいて苦勞もしたが、桜井達がまるでお姫様のように大事にして

きた人間と言ってもいい。言ってみれば、事務所にとっての箱入り娘というような扱いだっただが本人は余り自覚がないらしく、不遜なところは全く見あたらない。上司である桜井にも、梶のような他のタレントのマネージャーにも、そして瑛のような後輩のタレントにも接する態度は全く差違がなかった。

彼女自身は自他共に認めるように、自分にも周りにも無関心なだけなのだが、優等生体質は抜けないらしい。どう思われようと構わない相手は、大嫌いな人間か自分にはまったく無関係な人間に限られる。仕事関係者にはできる限りの敬意は払う主義である。

どちらにしても高慢な感じとは縁遠く、表向きだとはしても周りにいつも気遣ってくれる。梶も薄々玲のこの態度は仮面を被っているせいだとは感じていたが、自分のようなものにまで気遣ってもらって悪い気はしない。

「またゆっくり話しましょう」

瑛にもそう言って玲はホテルへ入っていった。

「揉めたんですか」

梶にもだいたいのは想像が付いた。

「いや、揉めるってほどでも……ない……そうでもない……か」

梶は溜息をついて車を出す。

「ありゃ、大変だな。思いこむと何とか……ってやつだ」

さっきの甲斐のことを思い出して瑛は呟いた。

「話には聞いてますがね」

「でもあれだろ？玲は甲斐より瑞紀って方と……じゃないのか？」

「知りませんよ、そんなこと」

「神崎さんが居ないからなあ」

「まだ帰らないんですかね」

「そんな噂もないんだろ？」

「聞いてませんが。でも神崎さん達のことは会長の直轄ですからね、私たちにはわかりませんが」

「ま、俺達には関係ないか」

「揉めないで下さいよ」

「なにがだよ」

「さっきのことで誤解されたんじゃないですか？天野甲斐がうちの事務所の人間ならいいんですが、余所のタレントですからね。玲さんはともかく、瑛さんはもめ事起こさないで下さいよ」

「するかよ、そんなこと」

「どうだか……」

心配性の梶は呟く。

「だいたい、しつこくしたら嫌われるぜ。程々にしないと」

「あなたが言いますか、そう言うことを……」

梶は胃が痛くなる思いだった。瑛が今一緒に住んでいる相手は、そうやってストーカーのよう

にしつこく付きまとい、手に入れた相手だったからだ。梶が当時どれだけ気を揉んだか知れない。瑛は自身が大問題児だということに、本人にはまったく自覚はない。

「天野君もあなたには言われたいと思いますよ」

梶はもう一度大きく溜息をついた。

玲は時間のあるときにはvisionの仕事場に出向くようにしている。最近は減ったが、最初の頃は自分が挨拶に出向き、この子達をよろしくと言って回ったものだ。玲はこの業界には長いからスタッフも出演者も顔見知りが多い。visionのメンバーが現場で軽々しく扱われないための保険のようなものだった。

彼らのバックに有名人がいると思われれば蔑ろにもされないし、興味も持ってもらえる。最近順調に忙しくなった彼らにそれほど必要な行為ではないが、ある意味お願いして回ったのだから義理も生じている。現場で玲が歓迎されるのであればたまには顔を出すことも未だ必要だった。

予想以上に忙しくなったvisionを確保しようと最近現場は必死である。玲に取り持ってもらおうとする者も現れ始めたが、玲はあくまで単なるプロデューサーでvisionは彼らの事務所が管理している。玲が彼ら自身のことにすべて口出しできる立場ではなかった。

瑞紀の映画主演の折りに玲にも出演して欲しいとオファーがあった。

玲自身も映画出演したことがないので、映画会社やプロデューサーが飛びついたのだが玲は断った。せっかくの瑞紀の映画初主演に玲が出て行ったら台無しである。瑞紀への注目度が下がってしまうからだ。

その代わりに、主題歌でならと申し出た。これなら宣伝効果もあり、表だって邪魔にはならないだろうと判断したからだった。

瑞紀の現場の後は甲斐の現場に行くことにした。甲斐の現場は都内のスタジオだった。テレビドラマは局内よりもこういう撮影所で普通は撮影される。

甲斐は今までほとんど演技はしていなかった。Visionの活動と、モデルの活動で精一杯だったからだ。もちろん、甲斐の容姿と存在感でオファーは後を絶たなかったが、玲は役者仕事はしばらく押さえるように甲斐の事務所にアドバイスしてきた。

ひとつにはスケジュール的な問題。海外ブランドとの契約もあったので、いつ海外に呼び出されるのか予想が付かなかった。断るにもこの口実が一番問題なかった。

だが実際には他の理由もあった。無理して他のメンバーと被る仕事をさせたくなかったのだ。とうぜん、いずれは全員が役者の道を歩むのもわかっていたが、今の芸能界でそれは安易な道だった。

俳優も歌手もお笑い芸人も歌を歌う。同じように誰もが演技をする。芸域や役割分担のなくなった芸能界で個性を出すのはむしろ難しくなっていた。

それはグループの中でも一緒に、瑞紀が先陣を切って役者の道を選んだときに慶もいずれはそうなることがわかっていた。瑞紀と慶にはどんな役でもこなせる柔軟性があった。主役でも脇役でも、その個性が自在になるものを持っていた。

だが甲斐は……ひと目見ただけでもわかる。甲斐は個性が強すぎた。容姿やオーラも抜きん出ているので目立ちすぎるのだ。その性格がまんま表に出るせいかもしれないが、彼の押しの強さは主役に回ったときはいいが、脇役には向いていない気がする。たぶん脇に回ったら主役を食っ

てしまうだろう。

ある意味主演は簡単に取れる。トップに躍り出るのも難しくはない。だが、そういう役者は一見、華やかで良さそうだが、主演しか張れない役者と見なされれば、いずれ使いづらくなり見捨てられる。

それよりも若いうちはその華やかさを生かした仕事の方がいいように思えたのだ。それで挑戦させたモデルの仕事だった。ああいう世界は、役者や歌手以上に難しい部分がある。何しろみんな容姿で勝負しているのだし、自信がなければやってられない。人より美しいことが当たり前のだから、気の弱い人間ならプレッシャーに負けてしまうかも知れないが、甲斐ならその心配もない。

モデルの世界のことは瑛にもよく話を聞いた。甲斐を預かった当時、瑛もまたモデル、俳優と転身して歌手へと道を進めた頃だった。瑛が歌手へと転向した経緯には、桜井に大崎や玲も相談されたと言う事実がある。

甲斐の時は反対に瑛にモデルの世界のことを聞いたりもした。その結果、甲斐なら大丈夫だろうと判断したのだ。思惑は大成功で、まだ個人では無名に等しかった『天野甲斐』の名は世間の女性の話題をさらった。甲斐はあっという間に有名になり、visionと言うグループは注目され、器用で多才だった瑞紀が後を追うようにテレビの世界で活躍しはじめた。

ここに玲の作戦があった。とにかく人気があれば、使ってはもらえない。実力先行でスカウトされたミュージシャンでも芸能界では売れない可能性が多々あった。それをデビューして数年。その時点で売れていなかったアイドルなど本当はもう可能性などなく、後は消えていくしかない運命なのは仕方なかった

だが、玲が引き受けた以上はそうさせるわけにはいかない。自分がアイドルとして数年、この世界でやってただけに図式は分かっている。とりあえずは人気なのだ。そしてその後にプラスアルファとして『持続』と言うものが続く。

visionの三人の容姿は申し分なかった。だが言わせてもらえれば、この程度の容姿なら他にも探せばいるだろう。特別彼らが飛び抜けているわけではなかった。

そこで玲は思った。

『なぜ自分は彼らに惹かれたのだろう』そこに思い当たったのだ。一番に思い出したのは、彼らの『目』だった。初めて会った時の、あの刺すような目線。自分たちの縄張りに踏み込ませないような、無言の圧力。圧倒的な『なにか』があった。

生意気といえば生意気だった。玲は芸能界では大先輩に当たる。たとえ初対面で、面識がなかったとしてもあの態度はいただけなかった。

けれど、不快ではなかったのだ。むしろ興味を引かれた。そして決定打は、あの翌日。甲斐に会った時に感じた違和感。あの前日の攻撃的な視線と、翌日の無邪気な笑顔の落差は、男を知っているつもりの玲でさえ釘付けになるものがあった。

考えを変えて、プロデュースを引き受ける気になったのはその落差を受け止める余裕が玲にあったからだ。昔の彼女になら無理だっただろう。一回で、嫌な男だと撥ね付けたに違いない。

ならなぜなのか？

それは玲が大人になったからなのだ。

甲斐の不遜な態度も無邪気な笑顔も、素直に『かわいい』と認められる大人の余裕が玲に出来たからなのだ。折りしも、世間では『年の差婚』や『年下の男』がブームといわれる年代になっていた。

それならば、言葉は悪いがペットのように可愛がる男のアイドルが居ても不思議じゃない。世の自立したお姉様方にアイドルに嵌まってもらおうと思ったのだ。甲斐達には怒ると思うので言っていないのだが、玲が感じた気持ちは多分、世の女性たちの共通な思いになる気がした。

大人の女には年下の異性に癒される時間が必要だし、その相手に使えるお金も充分ある。これを狙わないでどうする？と言うわけだ。年下の男とは言っても、実際にそんな相手とつきあえる人間はそうは居ない。アイドルはその疑似体験のために居るのだ。

いままでアイドルというのは若い女の子のものだった。実際、『vision』もそのためのアイドルだ。だがこれを『商品』と考えた場合には、それではあまりに勝算が少なすぎた。賞味期限も短い。だが年上の女性相手ならばそんなものは関係ない。

ライフスタイルも自分のポリシーも、ある程度出来上がってしまった女性達に選んで貰えれば、そうそう若い女性のように飽きることは少ない。長く大事にして貰えるはずだった。お気に入りを選んで貰えれば勝算はあった。

本来玲は『商品』として扱われるアイドルには辟易していた。自分がそうだった歴史があるから尚更なのだが、自分がプロデュースするとなれば話は別である。しかも売れなければ、visionの将来はないのだから仕方がない。

玲はvisionのプロデュースを引き受けることにした時に、それまでの自分の価値観や拘りをすべて捨てた。嫌いだったこと、見ないようにしてきたこと。利用すること、媚びを売ること。大嫌いだったそのひとつひとつが、裏を返せば、彼らを売る為の武器になる。玲はそのために自分が拘ってきたすべてのことを一回全部捨てたのだった。

今から思えば。そもそも玲にそう決心させてしまう彼らもすごかったことになる。

割り切った玲は、まず甲斐をモデルにして女性ファッション誌を片っ端から制覇した。そして徹底的に甲斐の容姿を売りにした。容姿に加えてアイドル→ファッションモデルという奇妙な履歴に女性たちは引き付けられ、次にアイドルとは思えない甲斐の不遜な態度に苦笑しながらも許容しはじめた。

この女性の反応の仕方は瑛の時も同じだったし、実は徹もそうだった。瑛はステージ上で『俺様』で勝手な態度を崩さなかったが人気は凄まじかった。

徹はといえば、工作中は優等生の顔を崩さなかったが、プライベートでは女を振りまわす天才だった。年下年上を問わず手当たり次第だったが、正確には女達の方が放っておかなかったのである。そして圧倒的に年下よりも年上の女性が多かった。手当たり次第……と言った風の徹の所行を女たちは憎むどころか許したのは年上の女性が多かったせいもあると思う。年上の女たちは徹に甘かった。

玲はそれをずっと見てきたのだ。昔は理解に苦しんだが、今なら彼女たちの気持ちが分かる気がする。今の自分も甲斐達に振り回されながらもそれを楽しむ余裕がある。同じようなことなのだ。

そして世の男を何とも思わなくなった世代の自立した女性陣は、容姿が良く元気で、そして個性的な男が好きになる。恋人でなくていいのだ。面倒がない、バーチャルなもので代用させることができる。

そしてここが肝心なのだが、働く彼女らは年下のアイドルに充分、投資してくれる。CDを買い、雑誌を買い、ドラマを見て、DVDも買う。

果てには彼らがCMを受け持つ商品を買って、映画、舞台、ライブのチケはどんなに高くても買ってくれる。若い女の子には出来ない投資をしてくれる。

しかもライフスタイルの確立している彼女らは、いったん好きになると『飽きる』と言うことがあまりない。飽きずにずっとファンを続けてくれるのもメリットだった。

visionの成功は玲が最初に彼らに感じたそのまま、それを世間の女性たちにぶつけた結果だった。もちろん裏ではいろいろ画策した。最初の頃は玲が甲斐といかにも付き合っているような噂を許容して、宣伝に利用したりもした。

あれは最初のきっかけで大成功だったのだが。成功だったのは宣伝効果だけで、甲斐と玲の仲には溝を作ってしまった。『溝』と言えるかわからないが、見えないなにかで妙なすれ違いが出来たことは否めない。

元々素直な甲斐が、こと玲の男性関係になると突っかかって来るのはその裏返しだった。出会って噂が出た頃、甲斐は玲に惹かれていた。それ自体は悪いとも何とも思わない。年齢的にも大人の女性に惹かれてもおかしくなかったし、間近で接している玲にそれを感じても不思議ではない。

現に瑞紀も慶も、似たり寄ったりの感情を玲に持っていることは分かっている。ただ玲が甲斐

の扱いを間違えてしまったのだ。よくある一過性のもの、もしくは想像の中のものであったり、割り切ったもの。普通はそういう関係だと思っていた。

まさしく慶にとって玲は憧れの対象で、思っただけでも行動を起こすことはない。瑞紀もどこまで玲に対して思い込んでいるのか知らないが、一線を画してそこから入ることはない。

たとえ身体の関係があったとしても、瑞紀は玲を支配しようなどとは絶対に思わないだろう。ある意味冷静だし、自分の『分』と言うものをわきまえている。大人だと言ってしまえばそれまでだが。

甲斐が玲に関係を迫ったとき、心はやれないといったら身体だけでもいいと言った。だがむしろ玲がそう約束させてしまったことが、甲斐の中でしこりになったようだ。いつまでも割り切れず、燻っていると云ったらいいか。

甲斐は素直な分、思い込みが激しくて融通が利かなかったのだ。一途だと、そう言えば可愛いのもかもしれないが、それは玲が甲斐のことを愛していればの話だ。

玲が彼らに注いでいる愛情は、異性に対するそれではない。瑞紀ははじめから感じ取っていたし、子供だった慶でさえわきまえている。

それなのに、ある意味甲斐が一番子供のような存在だった。計算も出来なければ嫌らしい駆け引きもしない。あまりに無垢だということを玲は計算違いしたことになる。おかげで甲斐は中途半端な気持ちを抱えたままで、複雑な気持ちのままずっと玲の側にいることになった。

甲斐のような人間には最初の時にはっきり撥ね付けた方が良かったのかもしれない。今となっては遅いし、玲にも本当のところはよく分からなかった。どうすればよかったのか……なんて。

瑞紀の時と同じように監督以下に挨拶をして、スタジオの隅で見つめる。確かな存在感のある甲斐はいい演技をする。最初の頃に玲が危惧したような部分は今はない。

年齢も相応になった甲斐は、現場のスタッフにも気を使いかなり気に入られていると聞く。共演の女の子とのツーショットを撮影していた。先日甲斐とあのバーに居た女の子だ。今時のアイドルとしては普通だろう。可愛いし、スタイルもいい。十九歳だったか。

玲は頭の中で彼女のプロフィールをめくる。こういうデータはすべて頭に入れておく玲だった。主な共演者やスタッフの履歴くらいはすべて引き出しに入れてあった。何で必用になるかわからない。

彼女のミスでスリーテイクまで撮り終わったところで撮影はアップした。今日の分は終了というところだった。

終了時間は二十五時を回っていた。この世界では一日は二十四時間ではない。午前零時を超えると、そのまま二十五時、二十六時と時間は重ねられていく。中には二十七時終了などという仕事も珍しくはない。

歌番組などと違って、ドラマなどは撮影が長引くと真夜中や明け方まで撮影は伸びる。しかも翌朝は、朝からまた撮影などというのも珍しくもない。睡眠もままならない状態が続くものなのだ。まして甲斐達のように他にも仕事を抱えながらやれば尚更だった。

コツン、とヒールの音を響かせて玲は座っていた椅子から立ち上がった。瑞紀の時のように黙

って帰るわけにはいかない。こんな真夜中に甲斐を尋ねてきたのは理由があるからなのだ。

数歩、歩いただけで甲斐が目ざとく玲を見つけた。

「玲っ！」

掘ねているのではなかったのか。心の中で瑞紀に皮肉を言いながら、仔犬のように自分の方へかけてくる大人のはずの少年を玲は見つめた。

スタッフがいるのでさすがに抱き着いては来なかったが、まさにその勢いで甲斐は近づいてきた。目の前に立てば、小柄な玲などすっぽり隠れてしまうほどの長身である。

「来てくれたんだ」

まるで参観日の母親を待ちかねるように目を輝かされれば、玲も多少良心が痛んだ。瑞紀や慶の現場を見る回数に比べれば、甲斐のもとを訪れる数は少ない。それは要するに、普段の甲斐の仕事が玲には経験のないファッション界の仕事だからと言うことでもあるし、仕事に関しては間違いない甲斐への信頼でもある。

だがその一部分は、このあからさまな甲斐の態度にある。体中で『玲が好き』だと言っている。最初の頃こそ、誤魔化しや宣伝にも使えたが、いい加減それも通じなくなっていた。

それでも本人は周りに何と思われようと構わない。本当に玲のことが好きなのだろう。その気持ちを疑ったことはないが、困っていることではある。もちろん玲には捨てられぬ思いがあるというのも一因だが、はっきり言ってそれ以外にも大いに原因があった。

玲は自分の性格を自分で把握しているつもりだった。基本的に自分のことを恋愛には向かない体質だと思っている。他人には心を開かないことが多いし、他人との時間より自分の時間が大事だった。

徹とのことは特別だと思っている。彼とはあまりに共有する時間や思いが多すぎた。彼への思いも男女のそれよりは少し複雑だと玲は思っている。

だから玲は誰かを愛することがほとんどなかった。愛情は今までもほとんどが与えられ、それを受け止めてきたに過ぎない。だからそれを理解できぬ相手はことごとく切り捨ててきた。

彼女が業界では擦り寄る男を相手にしないという評判が立つのはそのせいで、逆に相手が頻繁に変わるといふ噂も嘘ではない。男の友人は多いし、玲の酷く偏った生き方を理解する男とはそれなりの関係を結んできたからだ。

今も昔も玲が固執して自分を譲る相手は徹だけで、それ以外の男はいつ切れてもいいから付き合い合っているといっても過言ではない。実際そういう付き合いを重ねてきた。

だが、甲斐達をその仲間に入れるわけにはいかないし、もちろんそのつもりもない。だから出来れば距離を置いて付き会いたいと思っているのだが、最初の部分で間違えてしまった今では、修正できぬ時間の流れを持て余す玲なのであった。男と女の関係になるなど、玲の計算にはなかった。

なのに甲斐と瑞紀は予想外の形で玲に関わってきたのだ。

「お疲れさま」

玲は微笑んでそんな甲斐を迎えた。けして甲斐が嫌いなわけではない。むしろその反対なのだ。けれど甲斐を男として見ているわけではない。むしろ保護者の気分なのだから、自分のような女にいつまでもまとわりつかないで優しい恋人を見つければいいのにとと思う。自分はけして優しい人間ではないから。

「玲、遅くまで疲れなかった？」

玲がけして自分で掛けない優しい言葉を掛けてくるのも甲斐の方だった。

「大丈夫よ、明日は？早いの？」

「ん？普通かな？九時入りだよ」

「早くはないわね。食事でもする？」

「ん～腹も減ったんだけどさ。玲の部屋に帰りたいな。少し疲れちゃった」

笑顔で答える甲斐に、

「なんだか機嫌悪いって聞いたんだけど、そんな事なさそうね」

嫌味も込めて玲は甲斐をからかった。

「誰だよ、んなこと言ったの……って、瑞紀しか居ないか」

少しふくれた顔を見せる甲斐は本来の年齢よりもやはり子供にみえた。

「言われたわよ～あんたが機嫌が悪いのは私のせいみたいに言われて……」

もう五年以上、こんな付き合いを続けている玲にとってはいつもと変わらない会話だった。言われる甲斐の方も笑いかえすその背の向こうに、ふと感じるものがあって目線をやった。

玲の目に映ったのはじっとこちらを見詰める人影だった。後片付けにざわめくスタッフの間でじっとこちらを見ていたのは、甲斐と共演しているあの少女だった。じっと見つめるその目は、甲斐を見ているのか……それとも。

気にはなったが、玲にも予定というものがある。悪いが今は甲斐以外のことに気を配ってる余裕はなかった。

「仕方ないわね、特別よ。夜食は作ってあげるわ」

玲の言葉に

「やった！サンキュ」

甲斐は調子に乗ったまま玲の頬にチュッ、と軽いキスをする。

「こら、いい加減にしなさいっ！」

玲はまた母親のように小言を言わなければならない、周りのスタッフが見ない振りをしてくれることに感謝しながら甲斐の頭をたたいた。

(瑞紀……この男、どうにかしなさいよ……)

もう一人のしたたかな男の顔を思い浮かべて玲はため息を付いた。

マンションに帰宅する。ここで二人になるのはずいぶんと久しぶりかもしれなかった。甲斐は辺りを見回すように伺った。

最近ここで皆と顔を合わせることは少ない。最近はvisionの活動も個人で活動することが多く、年に数回のライブを除けば、同じく年に数回の歌番組程度。レギュラーの番組を三人で持つ話も

出ているのだが、なにせ三人とも忙しくなってしまった今では新しいレギュラーを始める話さえ立ち消えになってしまった。

正直淋しいと思う。

小さな子供が思う寂しさとは少し違うのかもしれないが、まだたいして売れなかった頃にいつも瑞紀や慶と遊び回っていたことや、玲と知り合っここで四人、いつも食事をしていた頃が懐かしい。

ずっと居着くなといつも言われて、それでもずるずると何日もここへ通ってきては、みんなで笑いあった。あのころは確かに明日の不安はあった。売れないまま終わっていくのかと、悔しさに泣いたこともあった。今はそんなことはなにもない。息付く暇もないほどの忙しさ。国内はもとより、海外でも仕事をする甲斐はなおさらだった。

しかし.....その分失った物も大きいと最近の甲斐は思うのだ。瑞紀や慶と馬鹿な話で盛り上がることも少なくなった。時間が無いのだ。雑誌やテレビの取材で三人そろっても、誰かの仕事がつかえていてゆっくり話す暇もない。もちろん三人で遊ぶなど、滅多に休日さえそろった試しはなかった。

他にも遊び相手がいないわけではない。女にも不自由はしない。けれども子供の時から連んでいる瑞紀や慶との仲は特別だったし、玲への気持ちも特別だと甲斐は思っている。

初めて会ったときから惹かれていた。正確には二度目に会ったときなのだが、あのとき自分の話にじっと耳を傾けてくれた彼女を見たときから好きになっていた。あとで瑞紀に、玲と巡り会えたのは甲斐のおかげだと感謝されたときも誇らしかった。

夢中で好きになり、好きになれば自分の気持ちを隠すことなどできない甲斐は、自分の気持ちを玲にぶつけた。言葉で拒否はされたものの、体は受け入れてくれた。そのときはそれで充分だと思った。

それだけでも半分は受け入れてくれたとあのときは思ったのだ。そう思った自分は子供だった。まだなにも知らなかった。大人の恋も知らなければ、玲という人間もよく知らなかった。

おかげで甲斐は酷いしっぺ返しにあう。

"体しかあげられない"そう言った玲に、"それでいい"と言ってしまった。それがどんな意味かもよく考えずに。

それ以来、玲の心の扉はどんなに甲斐がたたいても開いてはくれない。甲斐はいつも扉の前に佇んでる子供と一緒にいた。好きだと叫んでも扉は開かなかった。でもそれを開けてくれとは言えない。なぜならそれでいいとあのとき答えてしまったのは甲斐自身なのだから。

それ以来、甲斐の気持ちは行き場を失っている。わかっているのだ。玲が誰を好きなのか、永遠に甲斐のことなど振り向いてもらえないことも。

それでも好きなのだ。この気持ちは止められない。そしてその反動なのか、手当たり次第に誘われるまま女との噂は増えていった。けれど誰一人、この気持ちの飢えを満たしてはくれなかった。

出された夜食に甲斐は微笑む。トマトソースのパスタは初めて言葉を交わした日に二人で食べ

た物だった。偶然二人の好物は一致していた。

けれど夜中のこの時間に食べるのは甲斐一人。食の細い玲が夜食まで食べるわけもなく、けれど減多に料理をしない玲が甲斐のためだけに作ってくれたのも事実だった。

「おいしい？」

母親のような顔をして尋ねる玲に

「うん」

甲斐は素直に答える。

考えなしだと直情型の自分のことを瑞紀も玲も叱るが、またそこがいいところなのだと言ってくれたりもする。甲斐は自分の性格が嫌いではない。裏表を作るのは嫌いだし、自分にはできない。このままの自分が受け入れてもらえないのなら、それはそれで仕方ないと思っている。

正直すぎて傷つくことも多いが、不思議と裏切られることは少なかった。自分の手持ちのカードはすべて曝してしまうと言うのが甲斐の生き方だった。

玲は自分と甲斐の食後のためにコーヒーを入れていた。普段はブラックの彼女だが、遅い時間と甲斐の食後のデザートの意味も込めてミルクのたくさん入ったカフェオレになっている。その母親然とした振る舞いに甲斐は一瞬、自分は彼女に母を求めているのかと思った。

だが違うと思う。母親のような彼女は嫌いではないが、母親のいない慶とは違って甲斐はマザコンではない。ならば彼女のなにに惹かれているのだろう。珍しく甲斐は自分の感情の起伏を追っていた。

二人は他愛もないことを話した。忙しくてこうして話したことなどいつだったか。それ以前も体を重ねてはいても、ゆっくり話などしていなかった気がする。玲は嫌な顔もせず、いま甲斐が撮影しているドラマの話聞いてくれた。おもしろいNGのことや、ちょっとした現場の不満。誰にでも言えることではなくて、でも玲になら何でも話せる。

「しんどいの？」

玲は甲斐の言葉の数々をそんな言葉で聞き返した。心配そうな顔で尋ねる。

「そうでもないよ。確かに慣れない現場だけど嫌いじゃないし、不愉快でもない。それに瑞紀や慶だってやってるんだからさ、どうってことない」

「そう」

安心したように玲は言った。

「ならいいの。でも無理してるなら……」

「そんなことはないよ。そうじゃなくて……」

甲斐は言いよどむ。そんなことは問題じゃない。仕事のことは大変でも当たり前。ありがたいと思っているくらいで、新しいことができるのはこの上なく幸せだ。けれど、この淋しさは埋められない。それをどうしたらいいのかもわからない。

今日も甲斐はそれを玲に伝えられない。うまい言葉が見つからない。そして今更、それが欲しいとは言えない。代わりに出てきた言葉は……

「あいつとまだ続いているの？」

一瞬穏やかに微笑んでいた玲の顔が無表情になる。甲斐は自分が失敗したことを悟った。玲は自分に踏み込まれることを極端に嫌う。

以前、瑞紀のことでさえ鬱陶しがって大崎の家へ逃げ込んだくらいなのだ。その次の言葉が告げられない。甲斐は思う。自分はこんなに臆病な男だったろうかと。

「誰のことを言ってるの？瑛のこと？」

甲斐が言葉を飲み込んでも玲が代わりに自分で答える。けれどその声が甲斐を拒否していた。

「仲、いいよねアイツと」

甲斐はそれだけを言った。フツと玲は息を継いで、

「瑛は友達なの。なにを思ったのか知らないけど、甲斐が思ってるのとは違うのよ」

その顔はやはりさっきと同じ母親の顔だった。わがままを言う息子の言葉に言い聞かせる母親の声に似ていた。違う、と甲斐は漠然と思う。さっきまで心地よかったはずのそれが、今はすごく不愉快だった。

「だったらいいよな」

え？と言う顔で見返す玲の顔もろくに見ないまま、腕を引っ張り寝室へ連れ込む。

「ちょっと待ちなさい、待って……」

その科白はどこかで聞いたことがあると思った。玲を強引にベットに押し倒しながら、ああと甲斐は思った。それは前回ここを訪れたときにも、玲の唇から零れた言葉だったのだ。

そしてあのバーでも。同じデジャブに付きまとわれながら甲斐は思う。やはり今日も自分は扉の前でなにも言えずに佇んでいる子供なのだと。

そのとき、

『おまえはいつまでそうやってガキのまんまでいるんだよ』

怒ったような瑞紀の顔が頭に浮かんだ。

夜明けの気配に甲斐は目覚めた。

傍らの人間は死んだように眠っていた。それでも彼女を傷つけるような抱き方をしたことはない。愛してるから。それでも彼女の心は傷ついたらどうか。それならいいと、どこかで思ってしまう。

自分が彼女を傷つけられたらいいのに。でも彼女は傷つかない。徹のために傷つくことはあっても、それ以外のことで彼女が傷つくことなどあり得なかった。それは彼女と知り合ったこの五年間に学んだこと。

散らばった自分の服を拾い、引きずってリビングへ出る。ダイニングも明かりがついたまま、数時間前の表情をしている。飲みきれなかったカフェオレが冷めたままテーブルに残されていた。

タイミングを逃したそれは、もうまずくて飲めた物ではない。出来立てはあんなに美味しそうに優しかったのに。

ふと心が痛いと思っただ。昨日は淋しいと訴えていた心が今日は痛い。それは玲をあんな風に抱いてしまったからなのか。

「痛……い」

声に出したとたん泣きそうになる自分に気づき、あわてて目を擦る。サイドテーブルにもあるメモに『ごめんなさい……』と一言だけ走り書きをして甲斐は部屋を後にした。

午前中に予定していたドラマのロケを終えた甲斐は、夕方から他のテレビ局のスタジオに入る。久しぶりに瑞紀と慶が居た。瑞紀は相変わらずで慶は、

「おまえまた背が伸びたか？」

年が下と言うことを除いても慶の成長は遅く、いつまでも少年のようで痩せて小柄だった。それが二十歳の少し前から背が伸びて、成長期はとうに終わったはずの成人した今でも止まることをやめない。

「いくらなんでも……もう伸びないよ」

おとなしい慶は小さな頃は瑞紀にべったりで、甲斐にはなかなか懐かなかった。それが悔しくていじめたりもしたことが懐かしい。

さすがに今は甲斐を怖がることもなくなった。それでも百七十センチにやっと届く身長になった慶をかまいながら、気づかれぬようにそっとため息を付いた。玲はあれからどうしただろうか。

「どうした？タベは楽しかったんじゃないのか？」

玲をけしかけた張本人は涼しい顔で甲斐を伺う。同い年のこの悪友はどうしたことか、幼い頃から大人びて人の気持ちを見抜くのがうまかった。快活で屈託のない甲斐はリーダーに見られがちだが、本質のところ瑞紀に勝った試しはない。

それを悔しいと思った少年時代も確かに存在するのだが、いまでは瑞紀と張り合うことさえ馬鹿らしいと思ってしまう。

「行っただろう？玲が」

なにをどうけしかけるのか知らないが、あの玲と五分に渡り合えるのは瑞紀くらいだ。

「おまえさあ……」

言いかけて甲斐は黙る。いま言い出そうとした言葉に自分で驚いたからだった。

「なに」

思わず聞きそうになっていた。『おまえは玲を欲しいと思ったことはないの？』さすがの甲斐もそれは馬鹿正直すぎると自重した。そんなことを言っても瑞紀に笑われるだけだ。

この男はそんなへまはしない。いつだって冷静で世渡り上手なやつなのだ。けして冷たいわけではないが、そう言うところが玲に似ていると誰もが思うだろう。

「俺さ、もうだめかも……」

逆に自分でも予想しない弱気な言葉が漏れた。さすがの親友も啞然としてみている。慶は……息をのんで甲斐を見つめていた。

「何かやらかしたのか」

それでも瑞紀が自分を取り戻すのは早い。

「俺は、会えば玲を困らせることばかりしてる」

「今更だな」

甲斐の言葉を一刀のもとに瑞紀は切り捨てた。本当にヤナ奴だ。甲斐は口にしたことを後悔した。だが同時にほっとしても居た。こんな弱気なことを愚痴ったのはいつ以来だろうか？瑞紀はそんな甲斐をとうに見透かした様子で

「おまえが悩むのも馬鹿らしい。おまえに心配されるほど玲は柔な女じゃないよ」

まるで甲斐のプライドを引きずりおろすようなことを平気で言う瑞紀をにらめば、
「おまえが困った奴なのは、出会った頃から玲には百も承知だ。それにおまえがなにをしたって……」

「わかってるさ」

「なにを？」

「俺ごときが玲を傷つけるなんてことがないことくらいわかってる。俺にそんな価値はない」

最大級に卑下していった言葉を今度も瑞紀はあっさり切り捨てた。

「それがわかってるならいい。おまえも思ってたほど馬鹿じゃなかったんだな」

「瑞紀い……」

慶が横から口を挟んだ。さすがに甲斐がかわいそうだと思ったらしい。

「ケイ」

瑞紀に向き直られて慶が緊張した表情になる。

「おまえ、玲に好きだって言ったことあるか？」

唐突な質問に慶が固まる。

「好きって、いつも言ってるよ」

母親の居なかった慶は玲と出会ってからすっかり甘えた息子に成り下がっていた。

「そうじゃない、そう言う意味じゃない。わかるだろ？」

瑞紀に言われて、

「ないけど」

慶は正直に答えた。いままで一度もそんなことを瑞紀に聞かれたことはなかった。瑞紀や甲斐が玲といろいろあったことは知っている。けれど慶がそれを必要以上に問いただすことはなかったし、二人が慶に聞いてくることもなかった。

小さな頃から年下の慶は二人に子供扱いで、慶もそれに慣れている。二人が慶に秘密を持ってても慶は別にそれを不快だとも思わなかった。

「おまえの方が利口だな、けい」

瑞紀に変な誉め方をされて慶は居心地が悪くなる。もとよりこの長兄代わりに瑞紀に隠し事ができるとは思っていない。

「おまえ玲が好きだよな。母親の代わりじゃなくて……抱きたいと思ったことあるだろ」

瑞紀の爆弾発言に驚いたのは甲斐の方だった。

「けい……おまえ……」

甲斐の驚きの前に慶はすました顔で答えた。

「瑞紀……あんまり露骨に言わないでくれるかな」

そこには子供の慶ではなく、一人前の『男』が居た。

「なんで『素振り』も見せないか甲斐に説明してやれよ」

「いやだよ、なんでそんなこと言わなくちゃいけないのさ」

「いつまでもこいつがわからないから、おまえでもわかるってことを説明してやれ」

瑞紀の命令でも慶には従えないこともある。

「やだね」

珍しく強情にそう言いきって慶はそっぽを向いた。

「こいつ、猫かぶってたのか」

甲斐が呆れたように呟く。

「それはちょっと違うな」

瑞紀が代わりに答えて。

「猫かぶってるものにも、玲も承知で気づかない振りしてるんだし、慶はそれをいいことに未だ彼女に子供っぽい振りでベタベタ甘えてやがる。全くどこでそんな知恵付けたんだか、こいつが俺ら中でいちばん質（タチ）が悪い」

苦い顔で瑞紀が呟いた。慶は聞こえないふりで横を向いたままだったが、

「瑞紀っ！そういうのルール違反だよ」

不満そうに食ってかかった。

「甲斐がなにしようよ、なんで俺まで引っぱり出されるんだよ」

珍しく本気で瑞紀に詰め寄る慶に、甲斐は横から慶の頭をはたいた。

「なにすんだよっ！」

興奮のまま甲斐に向き直った慶は、

「だいたいなんだよ。甲斐も甲斐だよ。少しは分かれよっ！」

「なにがだよ！」

売り言葉に買い言葉、止まらなくなった慶はそのまま甲斐にかみついた。

「抱いてもらってんだろ？なにが不満なんだよ！」

「抱いてもらっ……!?抱いてもらってるって何だよ!!!」

「抱いてもらってるんだよ。なにが違うんだよ。それとも抱いてやってるとでも言うつもり？」

小憎らしいほどに甲斐の弱点をついてくる慶は、さすが瑞紀が育てただけはある。

「甲斐はいい奴だよ、嘘は付かないし、裏切らないし。でもだからってそれが正しいとはかぎらないだろ。少しは周りの人間の気持ちも考えろよ。空気読めよ！甲斐が馬鹿正直になればなるほど、周りが振り回されて傷つくのがわからないのかよっ！」

慶にことごとく欠点を指摘されて甲斐は一言もなかった。瑞紀にはいつも言われてる。いつもぶつけられる言葉。慣れている。

けれど……年下の慶にそれを言われたのは堪えた。一言も返せない。甲斐はなににも言わずに立ち上がると楽屋を出て行ってしまった。パタン、と閉まったドアの音に慶はふと我に返る。

「瑞紀い～～っ!!」

二人の話を横で傍観していた瑞紀を慶は思いきり睨んだ。

やられた。瑞紀の術中に見事填って甲斐にぶちまけてしまった。

「言い過ぎちゃったじゃないか」

「いいんだよ。たまには俺が言うよりもその方がいいときもある」

「甲斐……思い切りへこんじゃったよ」

すまなそうに言う慶に、

「だいじょうぶさ……おまえは気にすんな」

慶の頭をぼん、と手のひらでたたいた瑞紀は甲斐の後を追うように部屋を出ていった。

甲斐を探すのは簡単だった。

甲斐はいつも一人になりたいと、スタジオの隅の暗がりになり込んで、準備に右往左往するスタッフを眺めているのだ。一人になりたいたくても一人で居られない。一番寂しがりなのは甲斐だと瑞紀は知っている。

スタッフは忙しく、はじっこで蹲る甲斐やその隣に腰を下ろした瑞紀を気にもとめない。

「慶はな、ガキのようであれでちゃんと計算してるんだよ。玲に対して自分がどんな立場で居れば問題がないか。それで居てちゃんと玲の気持ちも理解してるから、玲を困らせるようなことは言わない」

甲斐は無言だった。瑞紀は甲斐を安心させるように続けた。

「玲はなにがあってもおまえを見捨てるようなまねはしないさ。おまえのこと大事にしてるから。それがおまえの望む形じゃなかったとしてもな」

独り言を言うように瑞紀は呟いた。

F A Xから次々流れてくる紙を見つめながら玲は微笑んだ。レコーディングのたびに籠もるスタジオには久しぶりにショウの姿があった。

次回の玲の新曲は瑞紀の映画の主題歌だが、この映画にはもう一つの目玉があった。それは映画の音楽を徹が担当していることである。

瑞紀の役はピアノのシーンも多いために徹がピアノ曲を何曲か書き下ろし、さらにはじめてバイオリンなどの弦楽曲も含むオーケストラ並の演奏曲を作曲している。クラシックの世界に進もうとしていた徹だが、さすがにここまで本格的に作曲するのは初めてで、かなりの時間を費やしこれに挑んでいる。

けれどいろいろな事情で日本にはいまだ戻ってきてはいない。作曲は向こうのスタジオで仕上げ、メールやF A Xでやりとりをし、今回は向こうで音取りをしたデモテープを持ってショウだけが帰国した。

その中には玲が歌う新曲のデモもある。これに玲が詞をつけて歌うことになっている。そちらはほぼ完成して、レコーディングも完成間近だった。テーマ曲の方は仕上がりがまだで、オーケストラの本録りとメインの曲を弾く徹のピアノを待つばかりだった。

「徹のピアノは向こうで録音するんでしょ」

「俺だけ帰国で悪かったね」

「そんなことないよ、徹も忙しいんでしょ」

徹はこの仕事と平行して向こうで歌う自分の曲の創作に追われ、とても日本との行き来の時間がとれないのだった。

「無理して往復することないよ、夏に一度帰ってきたんだし」

数ヶ月前、徹は数度目の帰国を果たしている。何ヶ月かに一度は帰ってくる徹は数日の休暇を過ごす、観光客のようにまたニューヨークへ戻っていく。

それをもう淋しいとか思うようなことはなくなった。徹は徹で向こうの活動に忙しいし、玲もいろんな意味で忙しい今、自分たちの距離をそう遠いとは思わなくなっていた。

この二年の間に玲も二度、向こうへ行っている。それは遠距離恋愛のように、緩やかでむしろ負担は少ない。切ない思いは抱いているものの、昔のことを思えばお互い自由なままに思っているだけでも幸せというものだった。お互いが相手を思うことに罪悪感を抱かなくて良いというのは実は初めてのことだった。

いつもつまらない事情やら思いに邪魔をされて相手を思うことにすらいつも陰りがあった。それに比べれば今は優しく晴れやかな時間の流れだった。

元々、最初から感じていたように男と女としての距離が縮まれば逆に上手くいかないのはわかっている。年齢だって若いとは言えない今は別に物理的な距離などどうと言うことはなかった。むしろ今までの中で一番いい関係と言える。

男と女というよりは、古い友人として大事な仲間として失えない相手だと認識している。徹と玲の間には常識的な男女間のルールは存在しない。もっと生きるための根源に関わる存在なのだった。だからお互いに相変わらず適当な相手がいるのも無言の了承なのだ。いまの徹の相手が日本人なのか金髪の相手なのかは知らぬことだが。

「結構いい感じだろ？」

デモテープを聴かせながらショウが言う。ショウも自慢なのだろう。

「がんばったね」

徹の成果を玲はそんな言葉で表現した。初めてでここまでやるのはかなり大変だったはずだ。

「かなりね、がんばってたよ」

側でそれを見ていたはずのショウが答えた。

「バイオリンとかはショウが手伝ったのでしょ」

ショウはピアノもバイオリンも弾ける。音大出身のショウはなんでも器用だった。

「徹のピアノソロと、実はこれ俺なんだよね」

いつもの柔らかな笑顔を浮かべてショウがピアノに被って聞こえるバイオリンの音をミキサ－の音量を上げながら言う。

（あ……）

音を聴いて玲はふわっと微笑った。

「たしかに……」

徹のピアノの音とショウの弾くバイオリンの音はよく聞けば聴き分けられる。それくらい玲には馴染んだ音だった。

「すごい……」

プロの音にも負けない。少なくともはじめ玲には聞き分けられなかった。

「けっこう必死になっちゃってさ、徹と二人で死ぬほど練習した」

ショウは言葉とは裏腹に楽しそうにそう告げる。スタジオに籠もって必死になる二人が見えるようで、玲は頷いた。

「いい作品になるね」

映像の出来と瑞紀の演技も気になるが、玲にとってはこの音楽もまた初めてづくしの勝負だった。

瑞紀の演技も評価を得るだろうが、多分徹にとっても勝負だろう。歌手としてではなく音楽家として飛躍するための一歩だ。これが評価されれば神崎徹の音楽家としての評価が上がる。日本国内はもとより、それは今活動している向こうでの評価にも関係するだろう。とても大事な仕事だった。

「あたしもがんばる」

スタジオで玲も気合いを入れ直した。ショウがその言葉を微笑んで聞いていた。

ショウと別れて玲はホテルに戻った。甲斐とあんなことがあって、またあの部屋へ帰りたくなっている。

そこへ来客があった。

ゆとりのあるホテルの大きな部屋を横切り、相手を確認して玲はドアを開ける。いつでも大胆な男は珍しくあたりを気にして部屋へ入ってきた。

「なんかちょっとイケナイ気になるなあ」

「なに言ってんだか」

ふざけた男の科白に玲は言い返す。

「珍しいわね、相談なんて」

男は高柳瑛だった。玲と瑛はどこでも目立つ。下手に食事でもしようものならいい話題を提供することになる。事務所で会うのが安全なのだが、あいにく二人とも都合が悪く、いっそのこと密室で……と言うことになった。

もっとも独身の二人がどこで会おうと、記事に書かれる以外で別に困ることはないのだが。玲自身はこれでも瑛の相手に気を使っているつもりだった。瑛のことを疑うような人間ではないが、つまらない噂でも気分のいいものではないだろう。

「それでなんなの？」

珍しい瑛の頼みに玲は耳を傾ける。

「誕生日なのさ」

何かと思えば玲は優しく微笑んだ。瑛は恋人の誕生日に贈る品を聞きに来たらしい。しかも今回は『特別』なんだそうだ。話を聞いて玲は納得した。

「いいわよ、一緒にみてあげるわ」

「サンキュ」

ほっとした表情をする瑛は珍しい。

「まったく……恋人には甘いわね、あたりまえか」

「当たり前、玲だって好きな男の前ではそうだろう？」

「どうだか」

玲は曖昧に微笑んだ。徹との間でどれだけ甘い時間があったかほとんど記憶にはない。やはり自分たちは恋人と言うよりは仕事を挟んでの『同士』と言う表現がぴったりだった。

「お、すげー」

瑛が見つけたものを手にとって眺めた。

「もしかして徹さん？」

玲が誇らしげに頷いた。瑛が手に取ったのは昼間スタジオでショウから説明されたオーケストラ曲の総譜だったのだ。瑛が見つけて手に取った厚い紙の束。それは今日ショウがスタジオで話していたオーケストラ曲のスコアだった。ファックスで送られていた変更が入る前の、ショウが持参してくれたこれは徹の手書きの原本だった。

ピアノですべての曲を表しながらスコアリーディングする。そのテープも受け取った。その後、編曲者に色々な楽器のパートを任せることになっている。ただピアノとバイオリンの部分は徹とショウが二人で四苦八苦しなから完成させたと言うのは、さっき聞いたばかりだ。

五線譜に書かれた楽譜はクラシック演奏者には見慣れたものだ。けれど今は楽譜の読めるアイドルも少なく、中には歌詞しか記されていない譜面で歌う歌手も今は珍しくもない。歌詞しか書いていないものを譜面と呼ぶかは知らないが。

瑛も最初は譜面など読めずにすべて耳から覚えていた。今は愛すべきパートナーの影響で譜面も読めるし、作曲した譜面も起こせるようになった。

玲と徹はもちろん譜面が読める。徹は当たり前だが、玲もこの業界に入ったときに徹やBlackRockのメンバー、大崎達の指導で、作曲も譜面できちんと起こすことが多かった。

それでも今回のこれは、いかに徹といえど大変だったに違いないのだ。原譜はもちろん訂正が激しいもので、それ自体はもう用をなすことが出来ない有様だった。いわゆる下書きのようなものだ。当然公に使われるものは写譜をしたものが使われる。

用無しの、ゴミ同然になった原譜をショウがわざわざ持ってきたのは玲のために他ならない。離れている場所で徹がひとつひとつ仕上げた軌跡。見慣れている徹の自筆の音符や記号、そして赤や青で記入された変更や訂正の文字。玲にとってそれがどういう意味なのか、価値なのか。

ショウは知っているから持ってきたのだろう。徹も玲の手に渡るから、本来人に見せるべきではないそれを手放したのだろう。差し出しだされたそれを胸に抱きしめた玲を、ショウは優しい瞳で見つめていた。

「さすが徹さん、すげーな」

瑛は感心したように譜面を見ていた。元は音楽を目指していたわけではない瑛だが、いまでは恋人の影響もあって自分で作る作業もこなす。ストレートに徹の努力の跡がわかるのだろう。

「あんまり見ないで」

「なんだよ、減るもんじゃないじゃないか。ケチだな。自分だけ独り占めかぁ？」

からかうように瑛が言うそれへ

「違うのよ。本来人に見せるべきものじゃないの。わかるでしょ？これ完成品じゃないんだから」

「なるほどね」

にやつく瑛に

「なによ」

強気で睨むと

「ふ～ん、人に見せるべきものじゃないものをもらっちゃうんだ。やっぱり」

「やっぱりってなによ」

意味ありげに笑う瑛に玲は心で舌打ちをする。しばらくからかわれるネタを提供してしまったようだった。

「まったく、ろくでもない男ね」

呆れる玲に瑛は楽しそうな視線を送った。

「でもよかったじゃん」

「なにが」

「なかなか徹さん帰ってこないからさ、どうなってるのかと思ったけど久しぶりのコラボで楽しいでしょ」

「コラボねえ……」

「帰ってくるんでしょ？」

「どうだか……」

「だってこれあの映画のでしょ？プロモーションとかあるじゃない」

「それどころじゃないと思うわよ」

徹はこの仕事とスケジュールがくっついてまだツアーのスケジュールが残っている。日本と行き来している時間はないはずだった。

「彼は作品上げるのがぎりぎりなんじゃないかな」

「なんだそうなんだ」

「たぶんね」

残念だとは思いますが仕方がないとも思っている。

「それより買い物……いつにするの？」

「あ、そうだ。それでさ……」

瑛の買い物につきあうなどなんの問題もなかった。少なくとも玲にとって何でもなかった。しかもこの買い物の件が瑛の恋人も公認のものだとなればなおさらである。だから気にもとめなかったこれが、のちのち事件の発端になるなど考えもしなかったのである。

数日後。

瑛と待ち合わせた玲は二人で有名な銀座の宝飾店を訪れた。そしてさらに数日後。そのときの写真が大きく週刊誌のグラビアを飾ることになった。しかもご丁寧に一週間前に瑛がホテルの部屋を訪ねた時の写真も掲載されていた。状況証拠は完璧だった。実情を知る人間は少ない。

そして当事者の玲と瑛、そして事実を知る関係者は本当のことが言えない事情があったのだった。

「今更だわ」

玲は覚悟を決めた。

「ほっときましょ」

「いいのか？」

行く先々でのマスコミの攻撃にいささか疲れたような瑛の声に、

「そっちは？」

淡々と玲が尋ねる。

「いや構わないけどさ」

「なら決まりね。わざわざ墓穴掘ること無いわ。一生かかったって私とあなたが結婚するなんてあり得ない。記者さんが待つと言うなら待ってもらいましょうよ。待ちぼうけ食うだけなんだから」

意地悪そうに呟く玲はこの手の攻撃には慣れていた。

「あなたの大事なハニーは大丈夫なの？」

からかうように玲が言うと、

「まあ玲に悪かったって言ってた。それだけなんだけどさ」

「私のことは気にしなくていいわよ、べつに迷惑掛ける相手が居るわけじゃなし」

「徹さん、怒んねー？」

「馬鹿ね、本気にするわけないでしょ」

「そりゃそうだ」

瑛は笑った。徹も瑛達カップルのことは知っている。

「私とあなたのこと知ってる人間なら、本気にしないわよ」

「だな」

瑛はやっと重い息を吐いた。

人の噂は七十五日と言う。

実際この業界で長い玲はすでに経験済みだった。しかも噂事態に尾ひれが付くのは当たり前、火のないところに煙どころか、自分で火を付ける人間さえいる世界だ。マスコミが自分のメディアを売るためにはなんでもするように、中には自分のスキャンダルを自分で売るような人間さえいる。作品の宣伝に利用されることもあれば……と、いちいちまともに相手にしてられない。

それでもそれで傷ついていた若い日もあったのだが、いまの玲にとってはすべてが『くだらない』の一言である。ゆえに誰にも弁明はしなかった。それよりも瑛の私生活には触れて欲しくない部分がある。むしろ自分と瑛がこういう形でマスコミを賑わすのは好都合かもしれなかった。

。

「いいのかねえ……そんでもって俺なんかと居てさ」

一ノ瀬湊はホテルの部屋のソファーに横になったまま雑誌を眺める。

「よしなさいよ、悪趣味な」

玲が咎めたのは湊が眺めているのが自分と瑛の記事だったからだ。

「なんで俺じゃなくて、瑛とばっか噂になるわけ？」

「なによ、噂になりたいの？」

「そうじゃないけど、なんかムカつくじゃん」

「よくわからないわね」

呆れたように言う玲に、

「どうせあなたにはわかりませんよ」と、湊は嫌味のように呟く。

「なんか俺、無視されてるみたいで気分良くないんだよね。だって瑛とはなんでもないのにここまで書かれて、俺とはもう何年になるよ」

「あのねえ……あなたとだって別にずっと付き合ってるわけでもないでしょ？」

「書かれたのは二、三回だったかな……」

さらに呟く湊に、

「派手に書かれたら、もうあなたとは終わりにするわよ」

とどめを刺すと、

「わかったよ、別に書かれないわけじゃないんだよ。面倒だし、そんなこと思ってるわけないだろ？けど男って言うのは変なメンツがあんだよ」

「馬鹿じゃない？」

くだらなくて付き合ってもらえないと玲は思う。瑛はどこまで行っても友人でしかない。男女の感情がないから間違っただけで寝ることもない。あちらも同じだろう。

じゃあ、数年のつきあいがあり、そこに男女の関係が混ざることもある湊とどこが違うのだろう？たぶん湊とも友人の関係は築ける。湊もそうだと思う。どこが違うか？たぶん湊には気にする大事な相手が居ないからだ。湊に大事な人間が出来たら二人の身体の関係は終わる。友人に戻るだけだ。では自分はどうかなのだろう。自分はどこでその区別を付けるのか。

徹との関係はほとんどプラトニックで、そのせいか昔からお互いに相手が居ても気にしなかった。おそらくものすごく歪な感情なのだ。完全に体と心が分離してしまっている。しかも互いにだ。

もっとも身体を束縛する関係なら二人の恋は十代の時に終わっていた。それがなかったから未だに続いている想い。断ち切れないそれがいいのか悪いのか、もう玲は考えることを放棄している。

一時は思ったのだ。すべてが手に入らないなら、いらぬ、と。だからこそいったんは別れた。でも自分と徹は半身がすでに結ばれたままだと気づいてしまった。そのことを認めたからこそいまの平穏なのだ。けれど気持ちが結ばれても身体は離れたままだ。

他の誰か一人を求めることはないが、不特定多数を求めることには慣れてしまっている。そこに罪悪感もなければ、疚しさもない。玲が気にするのは一点。相手に大事な人がいるか居ないか。それだけなのだ。誰かを傷つけるのは嫌だから。お互いがフリーな関係なら枷はない。

だが玲は気づいていない。相手の恋人ばかり気にしているが、自分の相手自身には少しも容赦がなかった。自分が割り切れるからといって、相手もそうとは限らない。でも玲の割り切った考えはこうはじき出す。最初から納得できなかった関係はお互い様だと。

そこに絡む感情の複雑さには頓着しない。玲の感情が細やかになるのは徹に対してだけなのだ

。他の人間に対しては非常にドライだった。

「瑛に会っても絡まないでよ」

湊は浅はかな人間ではない。玲の情事は芸能界では知る人ぞ知る事である。徹もそうだったが、玲の恋愛も派手だとも思われている。だが実際にはそれほどでもないのだ。大崎をはじめ、ただその相手が目立つのだ。

容姿端麗、才能もあって頭のいい……と形容詞が続いていく相手がほとんどで、だから数人のその相手達がかかなり目立つ。そして中には瑛のように純粹に男友達も多く存在する。湊も多間に洩れない相手だった。容姿端麗は意識してのことではない。けれど、才能と頭の良さは選ぶとき、かなりの比重を占める。

玲ははっきり言って頭の悪い男は嫌いなのだ。自分たちの状況も冷静に判断できぬ男ほど信用ならないものはない。ましてやこういう仕事をしているのだ。だから同じ仕事仲間の湊が瑛にまずいことを言うことはあり得ない。それでも念を押す慎重さを玲は持ち合わせていた。

「これだけ付き合っても信用ないのかねえ」

「そう言うわけじゃあ……」

湊は冗談半分、本気半分で皮肉を言う。玲が人を信用しないのは有名だ。彼女の信望者なら誰でも知っている。あれだけ彼女に尽くしている仲間さえ、彼女はどこまで信用しているのか怪しいものだと当人達も納得している。

彼女の人間不信は重症だ。だが彼女を愛する人間ならそれは十分承知している。納得しているかは別だが、承知はしている。承知の上でこうやって付き合っているのだから仕方がない。湊が付く溜息を玲は気づかぬ振りで無視を決め込んだ。

湊が彼女に惚れ込んだのは直に彼女を知ってからだった。アイドル時代の彼女を知るには湊は少々若かった。湊は玲よりも六歳年下である。いまでは大した年齢差ではないが、彼女がデビューしたときはまだ八歳の子供であった。彼女の最初の引退騒動のときでさえまだ十三歳。この世界に入るまでは彼女に対してさほど印象はなかったと言って良い。

湊は元々歌手志望で田舎から上京した。地元では容姿も歌唱力もなかなか良いと、人気もあったしアマチュアにしては破格の数のライブ経験もしていた。よくある話だが、地元ではちょっとしたプロ並みだったのだ。

地元で世話になった人の紹介でA・E（アカデミック・エンターテイメント）のオーディションを受けた。受かったところまでは順調だった。デビューもわりと早かったと思う。だがその後が問題で、まったく売れなかったのだ。

容姿が良くてちょっと歌のうまい歌手ならこの世界には掃いて捨てるほどいる。箸にも棒にも引っかからない。きっとそんな感じだったのだろう。

二十歳で上京して数年は存在も余り知られていなかった。そのまま田舎へ帰るしかない湊に転機が訪れたのはドラマへの出演だった。俳優になるなど全然考えていなかったのに、食べていくためには仕方なく端役を引き受けた。そしてその後、湊は方向転換をせざるを得なかった。

端役にもかかわらず、湊に対する問い合わせが殺到し、すぐに次の仕事が決まったからだった

。その後二年ほどで湊の存在は若者なら知らぬものはなくなったが、皮肉なもので湊が本当は歌手だと知るものはその半分も居たかどうか。

もっと皮肉だったのはラジオの番組を引き受けてからは湊の声がいいと、さらに人気が上がったことだった。歌手のつもりの湊には面白くない結果ではあったが、そうなると思した歌の方も人気が出てあつという間にミリオンも出せる歌手になった。

この世界の不思議さである。

俳優をやる前といまの湊と、別に変わったところはないのに、世間の認知度は百八十度変わった。以前落ち込んでいた湊に、やりたいことがあるなら環境を整えるべきだとアドバイスをくれたのが玲だった。歌がやりたいならとりあえず人気を保て。人気があればなんでも出来る。そんなふうに玲は言った。

同じ事務所に所属はしていても『葉月怜』は別格である。神崎徹と並んで、他のタレントとは違い、社長自ら指揮をとってマネージメントしている歌手である。接点はほとんどなかったのだが、録音スタジオなどですれ違ったり面識はあった。

どこで湊の悩みを聞きつけたのかは知らないが、ロビーで休憩が一緒になったときにそう言われた。以来、たまに相談と言うほどではないにしろ話をするようになり、気づけば身体の関係もできていた。

だが何年経ってもそこに馴れ合いとか、生臭い感情がわからないのはどうしてだろう。正直、湊にとっての女は玲ひとりではない。だからこそわかるのだが、彼女は不思議な人だった。いまだにつかみ所がない。

わかることと言えば、彼女の中にはずっとひとりの人間が住んでいて、他の人間は入り込めないということだけ。無理に入ろうとすれば、彼女から二度と声も掛けてもらえないだろう。無理強いする人間は男であれ女であれ、たとえ目上の人間でも彼女に切り捨てられる。

彼女の方が捨てられることは絶対はない。なぜなら彼女の方は絶対に他の人間を求めないからだ。そう言う彼女を理解する人間だけが、彼女の側にいられる。友人関係もしかり。

湊は思う。身体の関係など彼女にとって何の意味もない。友人も情人も彼女にとって大差はない。それはどちらも大切なのではなく、どちらも彼女にとって大した意味はないのだ。彼女は本当のところ誰も必要としていない。神崎徹、彼以外は。

そんな扱いにも関わらず、彼女とこうしているのはなぜだろう。彼女には惹きつけられる。それがプラスの思考ならいいのだが、おそらくそうではない。彼女の中の昏い部分に引き寄せられる。やっかいだと思いながら、彼女から目が離せないのが実情だろう。

そこには情人も友人も境はない。彼女に言わせれば、すべてひっくるめて『仲間』なのだ。彼女を真の意味で理解して支えようとする者達は彼女のブレーンになり、仲間になる。彼女が必要だと理解する前に、周りの方がつい先に手を出してしまう。彼女という人を知ると、何とかならないかと足搔いてしまうのだ。

高柳瑛はやはり同じ事務所で、俳優兼歌手と言う立場から湊とはライバルと見られがちだが、当人達はそうではない。瑛は元々モデル出身であり、湊のように望んで歌手になったわけではない。彼は櫻井社長が見つけて育てた歌手だ。

ただ似ていると言え、望んだ訳でもないのにお互い本業ではない違う仕事をしているところか。だがそれさえも根本的には俳優業に対する思いとか認識は違うに違いない。瑛はどちらかというと周りが仕事を選んでさせている。『高柳瑛』と言うブランドを周りが作り上げているのだ。そして彼はその期待に充分応えるだけの努力と才能を持っていた。

湊は違う。自分のやりたいことを自分で選んでやっていた。歌がうまくいった今でもたまに芝居をしているのは、芝居のおもしろさに気づいてきたことと、演じることが歌に通じるものがあると気づいたからだった。

それについても以前、玲が面白いことを言っていた。なぜ玲は余り芝居をしないのかと尋ねたら。『私は歌うときに充分演じているからいいの。芝居もできないわけじゃないけれど、映画や舞台は持続させる体力が私にはないから。三分の歌の中で、充分表現できるからそれでいいのよ』

彼女の中では二時間、三時間の映画や舞台も、たった三分の詞の世界も余り違いはないらしい。自分の言いたいことが伝えられれば、それでかまわないのだろう。むしろ湊はたった三分で伝えられると言い切った彼女に感心した。

それ以来、湊は芝居にも真剣に取り組んでいる。なぜなら、湊にはまだ三分で伝えられると、自信を持って言い切ることが出来ないからだった。

「不思議な女……」

理解仕切れないから今でも湊は彼女の側にいる。近くで彼女を見ていたいと思うのだ。

その記事は二週にわたって派手に載せられた。最初の記事の相手はよく知っていた。顔を思い出すと今でも腹が立ってどうしようもない。甲斐の目の前から玲をさらうように連れ去った男。

甲斐はあの夜のことを忘れてはいない。思い出すと猛烈な嫉妬心に襲われる。それは甲斐から見てもあの高柳瑛が、男としての理想に近いように思えるからだった。長身の体躯と整った顔立ち。自信にあふれた表情。

考えてみれば、モデル出身の瑛と、玲に勧められてモデルの仕事をしている甲斐は共通点があるのかもしれない。タイプで分けたら同類に入るのだろう。それだけになおさらライバル心を煽られる。

以前から玲はあの男との噂が絶えなかった。もちろんこの世界で噂など鵜呑みにする必要はないのだが、玲があの男と親しいのは間違いのない事実だった。

そしてもうひとり、一ノ瀬湊と言う男。こちらは同じミュージシャンでも、もう少し印象がソフトだった。瑛の方がどこか野生の獣を連想するほど攻撃的な印象があるのに対し、湊の方は歌や俳優としての役柄の印象もあるのかもしれないが、かなりソフトな印象がある。

瑛は硬派なのか、じっさい硬いのか知らないが、それほど女性の噂を聞かなかった。反対に湊の方はけっこう女性関係の噂は派手だった。本人もそのイメージを否定しないところがある。女性は大好きと、公言して憚らないところがあった。

どちらがより危険なのかと言うことは計り知れない。それ以前に、玲には徹以外は男に見えないという致命的な欠陥があるのを甲斐自身、身をもって知っているのに不安は消えない。

なぜなら、精神的には徹しか受け入れなくても、物理的にはそうでもないことを知っているのもまた甲斐自身だからだ。本来ならこういう考えを持ってしまう甲斐は玲の嫌うタイプだった。

状況判断や、自己抑制の利かない頭の悪い男の部類に入ってしまう。にもかかわらず、玲がこれだけ甲斐を甘やかしているのを甲斐自身は気づかない。瑞紀や慶同様、自分がどれだけ玲にとって『特別』なのかと言うことに、愚かにもこのときの甲斐には気づく余裕がなかった。

余裕が持てない甲斐はどんどん自分の望まぬ方向に進んでしまう。しかもこのとき、誰ひとりそのことに気づいて軌道修正してやる人間が居なかった。後に、このことを死ぬほど後悔した人間が居た。瑞紀である。

Visionはこのころメンバーの多忙にグループとしての機能を果たせずにはいた。瑞紀の不安はこのままグループが空中分解しないかと言うことで、それは自分の仕事がままならぬくらい瑞紀を悩ませた。

だが今のvisionは事務所にとっても稼ぎ頭で、デビューからしばらくは順調でなかった分、事務所が躍起になっていても仕方がない。玲の努力で上昇したvisionだが、そこには当たり前前にビジネスが存在する。

プロデュースをしてくれた玲には、それなりにギャラに相当する契約料が（おそらく年俸として）支払われているはずだし、そのことで仕事を減らしている玲の事務所にも何かしらの金が

払われているはずだった。

それがどれくらいの金額なのかと言うことは、瑞紀達には知らされてはいなかったが、たとえ玲の事務所が好意から、常識はずれの低金額で契約してくれていたとしても、あの葉月怜を何年も拘束している契約料がそれほど安いとは思えない。

少なく見積もってもこの数年で事務所が向こうへ払ったのは、ゼロが八個付く金額のはずだ。つまり、桁外れに稼ぐようになった瑞紀達だが、周りが思っているほどには瑞紀達の事務所は儲かっているわけではない。

もちろん以前から比べれば言わずもがなだが。そして玲に対しても契約料を払っているとはいえ、あれだけの人間がほとんど自分の仕事を放り出して損得抜きでvisionのために時間を割いてくれている。

もっと言えば、三人供がプライベートで玲に世話になっている精神的な繋がりも、金額に出来るものではない。おまけに玲のブレーンやスタッフまで、visionに関わっているともなれば、はっきり言ってもっと稼がなければ金銭的には採算が合わないことになる。

あくまで芸能界がビジネスで動いている以上、コストに見合わないことはやるはずがなく、あれだけ常識はずれにvisionのプロモーションが動いたのも、いずれ結果を出せると予想したからに他ならない。

そのために玲もそのスタッフも自分たちの仕事を放り出してまで、visionを支えてくれた。となれば、これから先も今までの膨大な投資を瑞紀達は返していかなければならない。

事務所に対しても、スポンサーに対しても、マスコミ関係、個人のレベルでも、玲が間に入ってvisionの売り出しに買って出てくれた人や会社に対して、弱音など吐けるはずもなかった。

だが、わかってはいても今の状況はかなりきついと言えた。あっという間に売れたアイドルが、よく自分を見失ってすぐにだめになるケースがある。瑞紀は今までそういう人間を横目で見てきた。自分たちはああなりたくないと思いつつ、そこまで売れていないのが現実だったのだが、今では人のことが笑えないと思いつている。それくらい余裕のない日々を追われていた。

「ふう……」

「どうした？疲れが出た？相変わらず忙しそうだなね」

「いや、大丈夫です。違いますよ。昨日ちょっと寝るのが遅かったから……」

場所も考えず、思わず付いた溜息を休憩中の監督に聞かれてしまった。これだから現場に出ているときは気が抜けない。

個人で勝負しているタレントと違って、個人で仕事をしていてもその背中には常にグループの名前と他の二人が付いて回る。甲斐や慶がどう思っているのか確かめたこともないが、瑞紀は少なくとも他の二人の足を引っ張らないように常に気を張りつめている。

瑞紀が何か問題を起こせば、必ずあの二人にも迷惑がかかるのは避けられないことだった。リーダーだと言うことを差し引いても、瑞紀は個人でばかり物事を考えるわけにはいかなかった。(もう何日会ってないかなあ……)

慶が特別番組の海外ロケに引っ張り出されてから一週間が経つ。慶に会ったのは出発の前日だ

った。地球の裏側にまで出かけた慶からは二回ほど簡単な電話をもらった。

逆時間の上に互いに自由な時間が少なく、電話もままならない。瑞紀は慶を初めてひとりで出した長期の海外に心配なのだが、考えてみれば慶もすでに二十に歳である。子供ではないのだからそんな心配は必要ないのだが、子供の頃からの習性はそう簡単に消えるものではなかった。

甲斐とは.....もう二週間近く会っていなかった。正直言って、いま心配なのは慶より甲斐かもしれない。耳に届いた噂を含め、確認したくて瑞紀は何回も連絡を入れているのだが甲斐には連絡が付かなかった。

向こうも視聴率の高い枠で初主演を張っている。演技慣れした瑞紀と違って緊張もしているだろう。だから小言など言いたくないのだが、最近の噂は目に余っていて瑞紀は落ち着かない。

そんな瑞紀を想像できるから、甲斐もおそらくわざと連絡を取ってこないのだ。少し前なら、そうは言ってもすぐに顔を合わせるようになった。だがいまは仕事もプライベートも重なることが殆どなく、結果として瑞紀は甲斐に会いたいと思ってもすでに二週間が経過していた。

(せめて三人のレギュラーがあのまま続いてたらなあ、少なくとも最低でも週一は顔を合わせられたのに)

唯一三人がレギュラーを務めていた番組はスケジュール調整がつかなくなり、打ち切られていたのだった。

瑞紀達がレギュラーを務めていたゴールデンの一時間枠は、そのまま玲がトーク番組を続けていた。瑞紀も一応レギュラーであるが、抜けてしまうこともある。それくらいに忙しいスケジュールなのだ。

特に映画の仕事を引き受けてからは、難しくなった。それでも玲ががんばって、その時間枠を明け渡さないのは、いつかvisionがまたその枠に復帰することを前提に考えてくれているからだと分かる。だから瑞紀もなるべくその期待に応えたかった。

なにしろ映画がこれほど手間暇かかるものとは思っていなかった。テレビドラマと同列に考えた瑞紀が甘かったらしい。けれど同時にその難しさと面白さが分かりかけている。どうやらこの先もこの厄介な仕事を引き受けるようになりそうだった。

モデルの仕事も続けている甲斐は相変わらず、一年の半分は海外だった。そこへ、大きな期首番組などのレポーターなどで海外取材にまで引っぱり出されるようになった慶とでは、三人で仕事をするのは難しくなるばかりだった。

中でも大きな痛手だったのは、玲と出会ってからずっと続けていたライブツアーがどうしても日程が取れずに中止になったことだった。

さすがにこれは三人にはショックで、事務所にも強行に抗議したのだが、それぞれのスケジュールはどうにも都合が付かずに諦めるしかなかった。このときのことでは、瑞紀達三人はかなり事務所に不信感を抱いた。自分たちの本分はどこにあるのか。Visionとしての活動をメインに考えるべきだし、玲や徹から学ぶものも、歌を本分として考えていた。

あくまで個人活動の諸々は軽んじているわけではないが、付録にしか過ぎないはずだ。しかもそのせいで、なおさら三人はバラバラになりいまのこの状態に陥っている。瑞紀の中にはかすかな焦りもあった。

休憩が残り後少しになったとき、意を決して瑞紀は携帯に手を伸ばす。このところ当たり前になった留守電にメッセージを入れた。

「彼女のマンションで待ってる、絶対に来いよ」

甲斐の今日の夜のスケジュールが空いていることは、マネージャーに確認している。もう電話では埒が明かないと瑞紀は思っていた。

甲斐は撮影終了後、携帯の着信を見て唇を歪めた。まるで、煩い母親に小言を言われた子供のような表情で留守電を聞く。

そこへ華やかな笑い声を立てて芹沢夏音（せりざわかのかん）が現れた。甲斐は携帯の電源を落とした。

初めの頃こそ、目立つ彼女と楽屋で二人きりになるのは、スタッフの目を考えて避けていた甲斐だったが、一週間も経つ頃には無駄な努力になり、二ヶ月を経過する頃には公然としたものになっていた。夏音との公然の仲は、いまやこのスタッフだけでなく外でも当たり前になったらしい。

週刊誌には何度書かれたか分からないし、ワイドショーも賑わしているらしい。甲斐はそういうものにいっさい興味はなかった。以前から騒がれることは人気と共にかなりの頻度であったが、一切無視してきている。

もっとも、アポなしインタビューのマイクを持つ人間に対して、これ以上ないくらいに不機嫌な顔で返す甲斐は、彼らが無視しているのではなく、単に拗ねているのだと言い切ったのは瑞紀だったが。瑞紀は甲斐が子供だと言いたいらしい。冷静に対処するならともかく、初対面の人間にも不機嫌な顔を隠しもせず晒す甲斐を、大人だとは認めない、瑞紀の得意技はポーカフェイスで、甲斐は一言も返せない。

（ムカつくんだよっ）

甲斐は声に出さずに毒づいた。子供の頃から瑞紀は妙に冷静な子供だった。幼い慶とガキ大将の見本みたいな甲斐とはまったく違うタイプの子供で、子供のくせに妙に大人の目線で物事を判断する。単純明快な性格の甲斐にとってはどうにも腹立たしい性格をしていた。

幼い日、初めは反発心から瑞紀に絡み、次はどうしようもなく興味がわいた。どうにか負かせてやりたい、ともすれば泣かせてやりたいとまで、いつも思っているのに、それに成功したことはなかった。

唯一、瑞紀を助けてやったと思えたのは、幼い頃に慶を連れて山へ入り、嵐にあってしまったときだった。母親を亡くした慶にカブトムシを見つけてやりたくて、瑞紀の反対を押し切って裏山に入り込み遭難の憂き目にあった。

怪我をした瑞紀を担いで山を下りた幼い頃の自分を、誇らしくいまでも思っている。幼い慶とまだ身体の細いだけだった瑞紀を、自分がずっと守ってやるんだと心に誓ったことはいまでも覚えている。

だが……大人になるに連れ、瑞紀は伶俐になる一方で、甲斐はどこかで瑞紀の小言を鬱陶しが

っている自分に気づいていた。いつからこうなってしまったのか。辿っていくと、それは玲に出会った頃から顕著になった気がする。いつまでも子供扱いされる自分と、何かと玲が頼りにする瑞紀。

瑞紀と玲が似たもの同士だと言うことは分かっている。だからあの二人は互いが読めてしまって、自分の分身のように愛せるのだ。甲斐にはあの複雑な性格の二人には付いていけないところがある。

何しろ泣くべき時に笑ってられるような人間なのだ。逆に、必要なら嘘泣きでもしそうな人種なのだ。

(大人なんじゃなくて、ひねくれてるだけじゃないか)

もう一度毒づいたとき、

「ねえ、どうしたの」

少々鼻にかかった甘ったれた声が聞こえた。

「あ、いや、なんでもない」

あわてて甲斐は表情を繕った。素直すぎる甲斐は頭の中で考えてることが、すぐに顔に出てしまう。隠し事などもっとも出来ない人間だった。

「ねえ、どっか食事でも行きましょうよ」

夏音は甲斐の腕にぶら下がるようにして上目遣いにねだる。夏音はドラマ出演はこれが初めてだった。グラビアアイドルとして人気が出た彼女は、いままでテレビの世界では単なるマスコットとしてのお飾りの役目だった。この出演に関しては抜擢だと思うし、彼女にとってはチャンスである。

まだ十九歳で、容姿だけで勝負しているのかと思いきや、かなり性格は肝が据わっていて大胆だった。おそらく上昇志向もあり、それほど頭の中身も軽くない。女優の中にでも、もっと軽い女は数多くいる。

その意味では夏音を悪くは思っていない甲斐だった。自分もきつい性格の甲斐は、彼女に対してはむしろ恋人と言うよりも同志に近い感情を抱いている。だがどうやら彼女の方はそうではないらしく、特に一ヶ月前に身体の関係が出来てからは妙に甲斐を独占したがるようになった。

その辺はいままで付き合った他の女とかわりがないようで、最近の甲斐は彼女を少し鬱陶しく思い始めていた。もとより、たいして思い入れもなく遊びの延長で付き合っている甲斐には、彼女の感情は憂鬱なだけだったが.....瑞紀の呼び出しを忘れていたわけではない。逆に嫌なことは後回し.....そんな思いで甲斐はいた。

「行こうか」

彼女の背に腕を回して甲斐は楽屋を後にした。

瑞紀はベランダに出て、静かに佇んでいた。ここから見える夜の街は、いつ見ても都会だと言うことを忘れそうなほど静かだった。

ベランダ側のカーテンが揺れた。やっと来たらしいと気配で悟る。しばらくして何うようにベランダに人影が現れた。

「電気もつけないでなにやってんだよ」

おっかなびっくりの様相で瑞紀の隣に甲斐が佇む。

「遅かったじゃないか」

その声が甲斐には責めているように聞こえるのは、だいぶ待たせた自覚があるからだった。この部屋の持ち主は今日も帰っていないらしい。

「ちょっとさ、断れないつき合いだった……」

甲斐の言い訳に、ふん、と言う声が聞こえたように思えたのは錯覚ではなかったのかもしれない。なぜなら、

「つき合いねえ……そんな甘ったるい香水の匂いつけてきやがって」

大きな声でもなく、乱暴でもなく、ただどこまでも醒めたように冷たく発せられた言葉が、瑞紀の静かな怒りを表していて、甲斐は背筋が少しだけ寒くなった。

甲斐と瑞紀は幼なじみで、年齢も同じ。なのになぜいつもこうやって甲斐は瑞紀の顔色を伺うようなことになるのか。それを考えれば、腹立たしくもあるのだけれど、実際のところ、こうやって突き放されるとなにも言えなくなるのも事実で。

「仕方ないだろう、どうしても食事につきあえて煩いんだから……」

言えば言うほど言い訳めいてくる言葉に甲斐は自分でうんざりした。なぜ自分は瑞紀にこうやって言い訳せねばならないのか。それが声と言葉に出た。

「だいたいなんの用だよ、わざわざ呼び出しやがって。俺は明日も撮影があるんだぜ」

少しの疚しさを、そう言って詰る言葉に代えて呟くと、

「そりゃ悪かったな、俺も明日は早朝ロケだよ」

藪をつついて蛇を出したというのはこのことらしい。

「で、なんだよ」

あくまで素直になれずに強気で迫ると。

「いや……」

今度は珍しく瑞紀の言葉の歯切れが悪かった。

「なんだよ」

甲斐も少し柔らかな口調で尋ねた。久しぶりにあって、別に喧嘩したいわけではない。

「このところゆっくり会う暇も、話す暇もなかったからさ」

瑞紀の言葉は甲斐には意外だった。そして嬉しくなる。瑞紀が自分に会いたくなって呼び出しにくることなど、いままで一度もなかった。もっともこんなに忙しく離れることも少なかったが。

海外の仕事で一ヶ月近く日本を留守にすることは何度かあった。けれど、同じ東京にいるのに会わないなどと言うことは本当に初めてかもしれない。

すれ違いの日々。よく見れば元々骨格の細い瑞紀はさらに一回り痩せてしまったように感じる。

「撮影大変か？」

役者としては瑞紀の方が先輩だ。甲斐などよりよほど慣れているのは分かっているが、今回の

役は大変だとマネージャーからも聞いている。しかも映画は初めてだ。

瑞紀はポーカークフェイスが得意だが、性格は神経質で大げさに言えば腺病質なところがある。ストレスや緊張ですぐに体調を崩す。さすがに玲ほどではないが、そんなところまで似ている二人だった。

「な、飲まねえ？」

瑞紀をベランダから室内に引き戻し、冷蔵庫からビールを出した。本当はウイスキーかワインでも開けたいところだが、変なところで融通の利かない瑞紀は早朝にロケがあるのに飲酒などしないのは分かっていた。

「俺、明日早いって言わなかったか」

案の定、口うるさいことを言い始める。

「だからビールにしたらろう」

玲のマンションはここ何年かですっかり甲斐達のセカンドハウスになっている。自分の家と同じくらいにはくつろげた。

「慶、どーしてっかな。まさかあの年になってホームシックはないだろうと思うけど。慶だからな。わかんないな……」

元々それほど口数の多くない瑞紀にかまわず、甲斐はひとりで話し続けた。正直言って、夏音のような女の子と居るよりは瑞紀や慶と居た方が甲斐にはくつろげた。それはたぶん瑞紀や慶も同じはずだった。

ひとくちビールに口を付けて瑞紀が話を切り出すまで、甲斐は上機嫌だった。だが—————

「おまえ、このところ派手すぎないか」

瑞紀が静かに言葉にした一言で一、部屋の空気が一気に冷たいものに変化したのを甲斐は感じた。

「遊ぶのも本気なのもどっちでもかまわないんだけどな。もう少し考えろよ」

「そんなの、記事を書いてる奴に言えよ」

「書いてる方の事情は分かってる。だからわざわざ提供するような真似はよせと言ってるんだ」

「俺がなにしたらって……」

「なにしたんじゃない、しないから悪いんだ。もうすこし慎重に行動することを覚えろ」

「俺は悪いことなんかしてないっ」

「そんなこと分かってる」

「じゃなんで……飯食ったり、飲みに行ってるだけだろっ」

「それだけだって言うのか」

瑞紀は大きな声を出さない。人より少し色素の薄い瑞紀の瞳がずっと細められた。静かに怒りをためているのかもしれないが、どんなときもそれを表に出さない瑞紀にいつも甲斐は苛ついていた。

「俺のことはほっといてくれないかっ」

「そうはいかない」

「お前に迷惑かけたのかよ」

「俺個人にならいい、いまにそんなことをしているとvisionの存続に関わるようなことになる」

「そんな大げさな」

「浮かれているうちはいいさ、お前も周りもな」

「浮かれてるとはなんだよっ！」

甲斐の激高に取り合わずに瑞紀は続けた。

「昨日今日の新人じゃないんだ、この世界のことを知らない訳じゃないだろう？いまvisionは上り坂だ。周りにはなにをやっても話題にするし、許す。それがいいことも悪いこともだ。だが、いつなにかがきっかけて足下を掬われるか分からないんだ。人気がなかったときならともかく、いまみたいな時こそ慎重にならないといけないんじゃないのか」

冷静に聞けば瑞紀の言うことはいちいちもっともな話だった。この世界、敵になるのはライバルばかりじゃない。今日味方に付いていたスタッフさえ、いつ手のひらを返されるか分からない。

そんな裏の事情をいくらでも見てきた。一年経てばどこへ行ってしまったんだろう？と首を傾げるタレントは掃いて捨てるほど居る。それ以上に日の目を見ずに消えていくタレントがどれだけ居ることか。

おそらく人の記憶の片隅に引っかかることの出来るタレントは一割にも満たないに違いない。そんな中visionも何年かが過ぎ、玲たちの手を借りてやっとここまでこれたのだ。瑞紀の危惧はもっともだった。

甲斐にだってそんなことは充分わかっていた。じっさい夏音とのこともそれほど執着しているわけでもなく、むしろなんでこんなに騒がれているのかと惑っているほどだった。

実はその裏でいろいろな画策があることに甲斐はまだ気づいていない。でもそのことは瑞紀の耳にも『噂』として入ってきていた。そのことを、そのまま甲斐の耳に入れていいのか迷っている。甲斐は素直で真っ直ぐなところがある。それだけに裏切りを許さない『正義』の部分があって、いまその噂をそのまま耳に入れるのは憚られた。

「少しは慎重に行動しろ」

そんな曖昧な言葉でしか、甲斐に伝えられなかった。

「なんでお前にそこまで指図されなきゃいけないわけ」

甲斐は完全に腹を立てていた。なぜ自分はいつも瑞紀に指図されなければいけないのか。自分だってvisionは大事にしている。瑞紀にそこまで言われたくはなかった。

「指図しているつもりなんかない。注意しているんだ」

「どっちだっておなじだろ？」

聞く耳を持ちそうにない甲斐に、瑞紀は知らぬうちに溜息をついていた。それがまた甲斐を不快にさせる。

「なんだよ、偉そうに」

「べつにそんなつもりじゃ……」

「リーダーだからか、それともお前が俺より何ヶ月かだけ年上だからか」

「そんなわけないだろう……なに言ってるんだよ」

今更だった。瑞紀が甲斐より二ヶ月早く生まれたのはもう二十年も前からお互いに承知のことだった。そんなことを理由に絡むこと自体信じられない。

「くだらないことを言うなよ……」

嘆く瑞紀の態度がなおさら甲斐を追いつめる。

「いつだってそうだ。俺の意見が通ったことがあるか。Visionのことも、慶のことも、俺自身のことさえお前はそうやって決めて行くんだ」

「なに言ってるんだよ！いつ俺がそんなこと……」

「決めてないって言うのか」

「当たり前だっ！」

「そりゃ初耳だ」

「なんだとっ！」

「分かってないならいいさ。俺のことはほっといてくれ。自分のことは自分で面倒見れるから。もう昔のガキじゃないんだ。おまえにいちいち面倒見てもらわなくても結構だよ」

そう言い捨てると甲斐は立ち上がって、手にしていた缶ビールの缶を手で握りつぶした。まだ残っていた缶の中からビールが溢れて零れる。離れたキッチンに向かってそれを思い切り投げると、缶は何かにつぶかってすさまじい音を立てた。

その音の後に、今度はリビングのドアが部屋を揺らすほど思い切り閉められた音が響いた。そして甲斐は出ていった。

嫌なことは続くのかも知れない。次に週刊誌の紙面を飾った記事はさすがに甲斐も驚いた。それは十五年以上も前に起きた、ヨウの死亡事故の記事だった。

—————謎の事故死……

—————メンバーの不審死と愛憎！

—————急性アルコール中毒の悲劇……

そこに踊った見出しの文字は衝撃的だったが、記事の内容はそれほど過激ではなかった。事実を表面からなぞっただけで、当時死亡したヨウが将来を期待されたドラマラーであったこと。仲間と飲んで帰った後にアルコール中毒で、家族にも気づかれずにそのまま死んでいたこと。

ショックでその当時玲が体調を崩したことなどが書かれていて、でもその程度のことは当時のファンなら知っているようなことばかりだった。ただその後ついでのように、ヨウは当時玲を好きだったのではないかと書かれていて、玲はヨウと徹とどちらを好きだったのかというような憶測と、それに続く突然の引退、結婚、離婚。そしていまの男性遍歴のようなことが書かれてあった。

内容は事実もあったが、大して実のない記事だった。だがその割に見出しが衝撃的すぎた。

「なんだよこれ……」

事実を聞きかじっている甲斐でさえ、見てショックを受けたのだ。世間がどう思うかは推して知るべしである。

「なんでいまさら、こんなこと……」

それは当然玲にとってもショックなことに違いない。甲斐の脳裏に徹が去る直前、大崎の家で過ごした夜が思い浮かぶ。楽しさの陰で感じた絆と、そこにある翳り。けして平坦ではなかった道のりがそこにあった。

「どうしてそっとしておかないんだよ」

それは音もなく近づく嵐の前兆だった。

「なんだよこれ」

ここにも憤慨している人間がひとり。偶然スタジオですれ違った瑛が自分以上に怒っているのを、玲は面白そうに見つめていた。

「なに、落ち着きはらってんだよっ」

「出てしまったものは仕方ないでしょ」

怒り心頭の瑛に、玲はどこまでも静かだった。だがこの年上の女性が大人しいだけではないことを、瑛は身をもって知っている。

「問題なのは……記事の内容じゃないのよ」

「なんだよ」

「今頃どうしてこんなものが出たのか、なんで今なのか、これが出る前にどうして察知できなかったか……」

いくつかの疑問をぼんぼんと挙げながら、玲は細身の煙草に火を付けた。ヘビースモーカーと言うほどではない彼女が、喉を労る必要があるスタジオでの仕事が終わる前に煙草に火を付けるのは珍しい。やはり見た目ほど冷静ではない証拠だった。

瑛は例の事件をそれほど詳しく知らない。ただ業界にいとあれこれと噂が入ってきて、まして同じ事務所には当時の関係者が何人もいる。正直言って人ごとではなかった。

ヨウは過去にショウ達のメンバーのひとりで、もちろん徹と玲のバックを務めていた。ある日、飲み慣れない酒を大量に飲んだあげくに自宅の寝室で不審な死を遂げた。

家族がリハーサルに出かけるヨウを起こしに行ったところ、自分のベッドの中で冷たくなっていた。

『急性アルコール中毒』それがレンを死に追いやった原因。問題だったのは飲めないヨウが前夜、なぜそんなに酒を飲んだのか。その理由を知っているのは、そのとき一緒にいた徹、玲、ショウ達仲間だけだった。

「謎だな」

飯田が帰国していたのは偶然だった。徹といつでも行動を共にしている彼にしては珍しい。だが、飯田と徹が共同経営している店を、今は人に任せている関係もあって、飯田は徹が仕事で離れられない時はたまにひとり帰国していた。たまたま居合わせた彼は、やはりいまこのとき突然現れた昔の傷に首を傾げる。

(いったい誰が……)

不審な思いは消えなかった。

「大丈夫か」

「うん？」

疲れた顔の玲を見つめて心配そうに飯田は言った。

「今日はもう何人の人間にそう言われたかなあ……」

人ごとのように玲が言う。

「そりゃ、事情を多少でも知ってる人間は心配するだろうよ」

「言わないでよ、余計なこと」

「なにが」

「徹によ、決まってるでしょ」

「言わないわけにいかないだろう」

「大げさに言わないでよ」

「言わないけど、あいつ帰るって言うかもなあ……」

飯田は溜息をついた。いま、徹は帰国できる状態じゃない。ツアーの途中だった。だがこのことを知ったら無理を承知で帰ると言い出しかねない。

「だ・か・ら・言わないでよ」

「無理だろう？……隠したら俺が殺される」

冗談半分に飯田は応えたが、あながち冗談ではない。徹はそう言う男である。

「あいつ、お前のことになると人間変わるから」

玲は黙り込んだ。否定はしない。だから無理をしているのだ。誰にも弱みを見せられない。自分の動揺を悟られたら、徹に迷惑を掛けるのは必須だった。

「お前がひとりで背負い込むことはないんだぞ。お前たちのせいじゃないんだ」

実際レンの死因は病死だし、たとえそれが不慮の事故死であったとしてもその原因の理由のひとつに玲が居たとしても、玲自身のせいではない。だが当時から玲は納得しなかった。

「お前のせいだというなら、あのとき関わっていた俺達全員のせいだろう」

飯田もすべてを否定しない。もしあれが『誰か』のせいだと言われるならば、自分たち全員のせいなのだ。ヨウの苦悩をわかってやれなかった自分たちのせい。

だがヨウが自分たちを恨んでいたかということ、それは違う気がする。あの別れ際のヨウの様子は何かを吹っ切っていた。リハーサルを、辛いなら休んでもいいと言ったショウの言葉に、「這ってでも行く」と言いきったのはヨウなのだ。

ヨウは来るつもりだった。それまでと変わらず、仲間の所へ戻るつもりだったのだ。

「ヨウ……………ごめんね……」

だが堪えきれずに零れた、玲の眩きと涙はそれが慰めにはならないと伝える。なにを言っても失ってしまったものは戻らない。ましてやそれが『死』ならばなおさらだった。十年以上かかっても塞がらなかった傷は、簡単に血を流す。抉られた心は癒えてはいないのだ。

(ヨウ……………なぜ死んだんだ……)

今更ながら飯田はヨウを責めた。

「あの人、とんでもない女なんじゃないの？」

「なんだと」

「だって昔、仲間の人が死んだって……」

「知りもしないくせに、よけいなこと言うなよっ」

甲斐の剣幕に夏音は黙った。けれど納得したわけではない。気に入らない。

甲斐は格好よかった。素顔は軽薄なところもなく、案外真面目でこの世界では珍しいほどだった。初めてのドラマの仕事で顔合わせをして、すぐに気に入ってしまった。親しくなるのに時間はかからなかった。だが、予想外に甲斐のガードは堅かったのである。でもそこがまた夏音の中の何かを駆り立てた。

しばらくして……甲斐が自分の方を見ていないことに気づく。そして視線の先。相手はずっと年上の女。しかもいつだって複数の相手が居るような。夏音の目にはどうしてもその女が自分よりも甲斐に似合っているとは思えない。自分の方が若く、一途に甲斐だけを見ている。

まして彼女にそれほど甲斐が相手にされていないと感じてからはなおさらだった。夏音にはなぜ甲斐がそれほどあの女、葉月怜に捕らわれているのかわからない。だが踏んではいけないものを踏んでしまったようで、玲のことを話題にしてからの甲斐は不機嫌きわまりなく、挙げ句の果てにその日の予定をキャンセルされて、帰ってしまった。取り残されて夏音の憎悪は高まる。

「なによ、あの女……」

絶対に負けないと、そのことだけが夏音の胸に渦巻いていた。

少々参っていた。今日のレコーディングは散々で、大崎にも帰るように言われた。スタジオにはショウと徹から電話が入った。やはり飯田は知らせたらしい。すぐにも帰る、と言い出す徹に「だめ。絶対に駄目。いま徹が帰っても火が大きくなるだけだから」

仕事を放り出させたくないのも確かだが、正直本当のことでもある。いま徹が帰国などしようものなら、マスコミが黙ってはいまい。おもしろおかしく話が広がるだけだ。それは徹にも分かったようで、しぶしぶ納得していた。

「大丈夫だよ、ほんと」

他にどういえばいいと言うのか。ホテルに行かず、マスコミが張っていないことをスタッフに確認させてマンションへ戻ってきたのは、やはりここの方が落ち着くからなのだろうか。廊下の電気もつけずに、微かに届く玄関ホールの明かりだけで広いリビングに辿り着く。ほっと息を吐いてソファーに腰掛けたとき、不意に奥の部屋の扉が開いた。

「居たの……」

出てきたのは瑞紀だった。

「今日あたり、帰る気がしてさ」

相変わらずの察しの良さに苦笑いが零れる。

「それともひとりで居たい気分だった？」

皮肉にも取れる言葉に

「ひとりで居たくない気分だったわ」

珍しく素直になってそう答えたのは、玲にしては上出来だった。

「酒？それともコーヒー？」

「あら、仕事はいいの？」

「今日は特別だよ」

玲の言葉に瑞紀は酒を出すことにする。ワインよりはスコッチか、ブランデーか。強い酒の方が今晚はいい。並ぶ酒を見ながらウオッカもあるなとひとり納得する。適当に、と言うよりは手当たり次第に持ち出してテーブルに並べる。

そして玲の隣に座った。

「明日、知らないわよ」

「飲まないだけで飲めない訳じゃない。安心していいよ、明日は午後からだから」

「それはずいぶん都合がいいわね」

偶然なのか、それとも玲のために都合をつけてきたのか。どうせ問いつめても強情な瑞紀は正直に言いはしない。

「徹さん……帰るって？」

「帰ってきてどうするのよ。火に油を注ぐようなものよ」

「そりゃ……気の毒に」

「……」

「徹さんが、だよ。向こうで苛々してる……ひとりで」

「仕方ないわ。徹の気持ちは分かってる。でもいま帰ってこられたってなにも変わらないわ」

「変わるさ……少なくとも……玲の側には居られる」

「マスコミが張ってるのに、会えないわよ」

「そうでもないさ、その気になれば。事実……俺はここにいる」

玲は微かに笑った。

「何かおかしい？」

「いいえ。なんで……いまとなりにいるのが瑞紀なのかしら、って。そう思ったの」

玲を心配する人間は大勢居る。その中でなぜ今瑞紀なのか。ふと……玲は不思議に思った。

「それは……ね」

瑞紀もふふっと笑って。

「俺が一番勇気があったから」

瑞紀の言葉に玲がおかしそうに笑った。

「確かに……」

玲を心配している人間は、同時に玲がどういう人間か知っている。下手に心配しようものなら、天の邪鬼な玲は相手に噛みつきかねない。けして弱みを見せたがらない人間。故にこう言うときの扱いに困っているだろう。そっとしておくべきか、見ない振りをするべきか。

現に大崎はここまで玲を送りながら黙って帰っていった。ひとりにするべきだと判断したからだ。賢明だった。

だが瑞紀は……

「俺、怖いもの知らず」

ふざけてそう言った。普段の瑞紀なら考えられない。他人にここまで踏み込むのは。けれど玲に対しては別らしい。いままで何度かあったように。

「あんたは時々、信じられないくらい大胆よね」

玲は呆れていった。出会った頃、玲を守ると言ってベッドに入ってきたときもそうだったが。瑞紀の冴えた美貌は大人になっても変わらない。近寄り難さはあるが、おそらく女優達にも相当言い寄られることがあるだろう。

「瑞紀……年上の女にもてるでしょう」

「それでも……最近は年下にもけっこうモテるさ」

玲のからかいにもさらっと答える冨太さは、その見た目には似合わないのだが、瑞紀を知っている人間には馴染みのものだろう。

だが相変わらずその近辺に、決まった女性の影はない。二人は、そうやってとりとめのない話をしながら酒を次々と重ねた。いくら飲んでも酔わない玲だが、瑞紀も似たような所がある。沈黙が重なった頃、

「疲れた……」

玲がそう呟いて、隣の瑞紀にもたれた。瑞紀は黙って玲の肩に手を回すと抱き寄せた。それだけの仕草に玲は酷く安心した。

それを……廊下から見ていた人間が居た。心配で尋ねてきた甲斐であった。

夏音と諍いをしたあと、足は自然とこの部屋に向いていた。騒動の最中、玲がこの部屋に帰ってくると思えなかったが、どうしても来てしまったのだった。マスコミが張っていたら面倒だったので帰ったかも知れない。

だが記事が出て一週間。わりと芸能界は話題の移り変わりが激しい。騒ぐときも大騒ぎだが、続いて起きた大物俳優カップルの破局とベテラン俳優の突然の死がそのあとの話題を浚っていた。

玲の話題が消えたわけではないが、新しい事件に取られる取材班と、玲の事務所がひいた徹底的な規制でマンションに張り込む記者は居なくなったようだ。そのまま玲の部屋へ辿り着いた甲斐は人の気配に足を止めた。

リビングのドアは玄関から直線ではないために一枚ガラスの扉になっている。ツートーンのデザインで両側が磨りガラス。センターが透明なガラスで、非常に洗練されたデザインだが、中の様子もひとめで分かる。

玄関ホールから直角に曲がる廊下の角からすっかり中が見えていて、玲と誰かが居るのがすぐにわかってしまった。しばらく見ているとそれが瑞紀だとわかった。こちらから見ると手前にいるのが玲でその向こう隣にいるのが瑞紀。部屋の照明はダウンライトで薄暗い。それでも暗い廊下からはよく見えた。

酒を飲みながら話しているらしい二人の距離がだんだん近すぎるくらいに近づくのを甲斐はじっと見つめていた。時間にしてどのくらいか。判断は付かなかったが、何かにとりつかれたようにじっと見ていた。そのうちに玲が瑞紀に寄りかかったのが見えて……気づいたとき、甲斐はマンションから離れた通りを歩いていた。

もう真夜中だった。そのまま、けして近くはない自分の部屋まで歩き続けた。そのときの甲斐の気持ちを表すのをどういえばよいか。高柳瑛と居るのを見たときの衝動とは違う。単純な嫉妬

とも違う。

強いて言えば……淋しさ、だろうか。まるで自分だけが取り残されたような淋しさ。あのときなぜいつものように部屋へ入っていけなかったのか。瑞紀と玲の親密さを知らないわけではない。今さら隠すことでも隠されることでもない。なのに入っていけなかった。

まるで自分だけが二人に置いて行かれたような、仲間はずれにされたような気持ち。不必要に卑屈になっているのかも知れないが、とても脳天気二人のあいだに入って行けなかった。まるで自信のない、不安な気分襲われた。何かに追われてでもいるような。自分だけが違うような。なにが自分をそんなに自信のない男にってしまったのか。

(どうせ俺なんて……)

本来の甲斐ならけして思わないような言葉を脳裏に浮かべて歩くと、気づかないうちに涙が溢れていた。何かが違う。何かがずれてしまっている。だが、それをうまく説明する言葉を持たない。素直に話せる相手が居ない。いまの甲斐にはいったい誰に自分を預ければいいのかわからなかった。一番の親友の瑞紀が遠い。一番好きな玲が、一番理解しがたい人間に映っていた。

玲は————必死に自力で踏ん張っていた。

以前のようにぐずぐずと崩れるわけには行かない。玲の高すぎるプライドはそうそう同じ過ちを繰り返すことを自分に許さなかった。

「ヨウ……」

彼のことは忘れない。自分の過ちも忘れない。けれど、ヨウは死んで自分は生きている。長いときの流れの中で自分にそう言い聞かせるくらいには立ち直っていた。けれど、彼のことを持ち出されるのは辛い。生乾きの瘡蓋を爪で引き剥がされるように、そこは簡単に血を流す。

けれどそれで悲鳴をあげるわけには行かないのだ。自分にはいま、大切なものが多すぎる。守るべきものも多すぎる。自分が動けなくなると、周りが出る影響が多すぎる。だからやはりなにもない振りをするしかない。

「ヨウ……ごめん……」

だから、ヨウのことはもう終わったのだと、過去のことだと自分に言い聞かせるしかなかった。

雨の降る中。

玲はダイと一緒にヨウの墓参りに行った。高台にある海の見える場所。ヨウとダイの生まれた町だった。大柄で体格のいいダイに比べてヨウは華奢で小柄だった。二人は近所の幼なじみで仲が良く、年齢差以上に二人は年の離れた兄弟に見えていた。そして少し年上のダイを追うようにヨウも仲間になった。

「ヨウ……」

花を供えて手を合わせる。脳裏に浮かぶヨウの顔が玲を悲しくさせる。なぜなら……ヨウはあのとき年を取るのを止めてしまったから。三十を越えてしまった玲とは違い、ヨウは二十歳のままだった。この先何年経とうとも、ヨウがもう年を取ることはない。

「ヨウ……わたし……とっくにあなたの年齢を追い越してしまったわ……」

それが悲しい。なぜヨウは一緒に時を刻まないのか。なぜもう隣で笑わないのか。思い出するのは恥ずかしげに照れるヨウの顔。最後に怒って徹に食ってかかった珍しいヨウの顔。徹を庇う玲を、悲しげに見つめたヨウの顔。

また明日、と手を振りあった夜明の街。そして……最後に見たのは横たわるヨウの白い顔。

「ごめん……ごめん……ね、ヨウ……」

謝りたい、昔のことも今またこうしてヨウを振り切ろうとしていることも。いまの玲には立ち止まるわけにいかない理由があった。

「あなたを忘れたわけじゃない……」

雨の中、墓の前で額ずいたまま玲は泣き崩れた。ダイは静かに慟哭する玲を見守っていた。

やがて玲とそのスタッフ達は、業界の中の不審な動きに気づく。怪文書がどこからともなく次々と出回っていた。ヨウのことはその前兆だったらしい。うち消しても消えない、瑛との噂。湊との情事。二年も前の、徹の離婚の原因に徹のニューヨークでの行状。

今のところ、大したことでない。記事にされてダメージを受けるほどのことではないのだが、問題なのはそこではなく、なぜそんなことがいちいちマスコミに流れて、そしてマスコミが取り上げるのかと言うこと。

「何かがおかしい」

桜井以下、川崎も大崎も警戒をし始めていた。

「それでレンの所へ行ったのか」

大崎と川崎に報告したのはダイだった。

「月命日でもないのか」

玲がヨウの月命日には出来るだけ墓参りをしていることは皆知っている。

それ以外に……というのは珍しい。

「急に行くって言い出して……」

「それで？」

ダイは黙った。

あの日の玲のことを説明するのは酷く残酷だった。沈黙に大崎と川崎はそれ以上追求しない。

「それが答えか……」

テレビの中では瑞紀の映画の制作発表が行われている。撮影もあと残すところ少し。今日は監督以下、主要キャストと、主題歌を歌う玲も記者会見に臨んでいた。ワイドショーの生中継も入り、当然集まったレポーターの質問は玲に集中する。

記者会見が本来の目的からはずれないように、玲はそこではいっさい話さないと決めた。その代わり……会見のあと他の出演者を先に会場から出し、玲だけが引き上げるわずかの間に記者の一番聞きたいことだけに答えた。

「彼が死んだのは事故です。彼は大事なメンバーでしたが、もうすでに何年も前のことなんです

。今さらお話しすることはありません」

きっぱりと、玲は言いきった。それを潔いと取るか、冷たいと取るか。それは世論の判断に任せるしかない。だがどのみち、こう言いきった以上はこの話は打ち切りと言うことだ。どんなにマスコミが集まっても玲の口からもうこの件は語られない。マスコミもそうそう無駄なことに費やす時間はない。

「やはりこう答えるしかないからな」

大崎は画面を見つめながら言った。過去のことになどならない。いつまで経っても。けれどこうなってしまった以上、騒ぎを納めるにはこう答えるしかない。

ヨウに対して、『過去』だと嘘でも言いきることが、さらに玲の傷を増やすのかも知れない。だが、このままであれば瑞紀の映画デビューにまで水を差す。この辺が潮時だった。

映画の完成も近い。三ヶ月後には公開の予定だった。このあとは公開に向けて精力的なプロモーションに入る予定だ。

だが騒ぎはさらに広がる。

次のターゲットになったのは甲斐だった。ドラマも終盤にかかり撮影もそろそろ終わりのこの時期に、なんと芹沢夏音とのホテルからの朝帰りを撮られてしまったのだ。

前夜シティホテルに入室するところと、翌朝出て行くところ。いままで噂になったことは数あるが、こんなに露骨な報道は初めてで決定的な写真とも言えた。

甲斐のいままでの相手にしても、ここまで撮られた相手は居ない。これは文章だけの記事とは決定的に印象が違ってくる。甲斐への世間の印象も悪くなりかねない。甲斐の事務所も青くなっているはずである。同時に、桜井たち玲の側も頭を抱えた。

「まずいな……」

これがもしも玲の関係で甲斐にも飛び火したのだとしたら。何とか手を打たなければならない。ここまできて、さすがに桜井の脳裏にピンと来るものがあった。まさかとは思っていたのだが、こうなると勘ぐりたくなる。芹沢夏音が所属しているのは、かつて桜井が居た事務所だった。つまり、徹と怜が所属していた事務所だったのだ。

(いったい……今頃になって……)

嫌がらせとしか思えない。

(いや、単なる嫌がらせならいいんだが)

桜井は嫌な予感に顔を曇らせた。

その日、夜遅くまでの撮影を終えた瑞紀はとある一軒の店の前に佇んでいた。ちょっとした路地の奥にあり、一般人にはわかりづらいこの店は、業界の若い遊び人達に人気があった。羽目を外して遊びたい芸能人が、それでも人目を気にするとき、こういう会員制とは言わなくとも常連客ばかりが集まる店は安心できる。

だがそれはあくまで他の店よりは、という程度で完全に安全なわけではない。それが証拠にこ

こに出入りする甲斐の行状は瑞紀の知るところとなった。しばらくすると、店から背の高い男が出てきた。足下がふらついている。かなり飲んでいるようだった。

それを脇から支えているのは小柄な女性。かなりのプロポーションなのは遠くからでも感じられた。独特の肉感的なスタイルだった。同じ小柄な女性でも、どこか硬質で中性的な感じがする玲とはタイプが全然違う。

それは内面の性格の違いなのだろうか。玲は女性らしい反面、女性を感じさせない何かも持っていた。『性』と言うものを意識させない部分も多々持っている。そこが捕らえどころのない彼女の不思議さのひとつなのだが。

だがどう見ても酔っている甲斐を、支えている……と言うよりはぶら下がっているようにも見える、彼女は『女』以外の何者でもない。まだ十九歳だと聞いた。それなのにあの'牝'のフェロモンはなんなのだろう。

瑞紀は酷く不愉快だった。いままで甲斐の女性関係でここまで不愉快になったことはない。もっとも……こんな場面を見たこともなかったが。

その不愉快な思いが瑞紀の表情に出ていたのか。近づいた甲斐が瑞紀の姿を見て、ぎょっとしたように足を止めた。瑞紀は甲斐の正面に立ち、甲斐の顔を見据えて言った。

「ずいぶんと、また……」

皮肉を言うつもりはなかったが、甲斐の腕に縋り付く夏音を見て出た言葉がこれだった。

「瑞紀……なんで……」

瑞紀は眉をすっと顰めた。甲斐が驚くのも無理はない。瑞紀は口ではなにを言おうとも、甲斐の行動に本気で関心を持ったことはない。ましてや甲斐のプライベート先に現れるなど初めてのことだった。

同時に……甲斐はいまの自分を冷静に判断して青くなる。瑞紀に見られたい格好ではなかった。酔いが遠ざかり、夏音に預けていた体重を取り戻す。瑞紀を前にして自然と取り繕う仕草になる。無様な格好は見せたくないという矜持が自然に浮かぶ。

甲斐の最低限のプライドかも知れなかった。案のじょう瑞紀は言った。

「あんまりみっともない真似はするなよ」

「なんだと」

「最近のお前……少しおかしいぞ」

無言になる甲斐に、瑞紀は少し口調を和らげた。

「何かあるなら……言えよ。お前の話くらい聞く時間はあるんだから」

長いつきあいだった。幼稚園で出会ったのは五歳くらいだったか。瑞紀にちょっかいを出してきた甲斐は、それからなにを気に入ったのかずっと瑞紀の側にいた。瑞紀も甲斐や慶が側にいることが当然になっている。

この世界に入ってからずっとそれは続いていた。そのバランスが崩れだしたのはここ数年だ。玲と出会ってから、visionが軌道に乗りだしてから、それがそうだというのなら皮肉すぎて笑えない。

三人の未来のために自然とそうになっていくのなら、瑞紀は否定はしない。いずれ大人になって

いくにはそう言う選択もあるだろうから。でもいまの甲斐は、それとは違う気がする。こんな形ですれ違っていくのは瑞紀の本意ではない。まして見ぬ振りは出来なかった。いままでで最大のお節介だと自覚しているが、それを笑われてもよかった。

「偉そうに……」

だが吐き捨てるように甲斐が言った。そう、最近甲斐はよくこんな目で瑞紀を見るようになった。苛立ちと、嫌悪と、そしてすこしの淋しさを覗かせて。

「いまさらだな」

瑞紀の甲斐に対する高圧的な態度はいまに始まったことではない。この程度のことでは瑞紀は揺るがなかった。甲斐という人間と昨日今日付き合ったわけではない。甲斐の中の何かがそう言わせているのはお見通しで、その点は甲斐が瑞紀を思うよりも、瑞紀は甲斐という人間を知り尽くしている。

だてに甲斐と慶を引っ張ってここまで来たわけではなかった。ただ瑞紀を苛立たせるのは、甲斐にそう言わせている『なにか』がよくわからないからだ。今さらなにをそんなに尖っているのか。瑞紀の見えないところで甲斐になにが起きているのか。瑞紀の心に小さな棘が刺さっている。『不安』と呼ばばいいのか。見過ごしてはいけないと、瑞紀の中で何かが知らせている。

「甲斐……これは警告だ。お前……このままじゃ駄目になるぞ。自分の将来だ。よく考えろ」

瑞紀はそれだけ告げると、背を向けた。甲斐が不快なのではない。甲斐の隣にいる女がどうにも不快で、その場にいることが出来なかったのだ。